
E t e r n a l D r a g o o n S t o r y

金獅子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E t e r n a l D r a g o o n S t o r y

【Nコード】

N 4 7 7 0 C

【作者名】

金獅子

【あらすじ】

悠久の大地フォルティア。かつて一人の英雄が残した神との壮絶なる戦い。それは伝説となって今も人々の間で語り継がれている。そして、数百年の時を越えた今、物語は新たな幕開けを迎える。

プロローグ（前書き）

やや長めなプロローグですが、呼んで頂ければ幸いです。

プロローグ

ETERNAL DRAGON STORY

～エターナルドラゴンストーリー～

開幕 ～プロローグ～

フォルティア、そこは豊かな大地と美しい水に恵まれた大陸。

かつて、およそ三百年前、この地で戦いがあつた。地上のすべてを戦場へと変えた厄災、大いなる神とその子供たちの戦い……

神が人を創ってから数千年、人間達は己の私利私欲の為に殺戮を繰り返し、悲鳴と憎しみにより、争いは更なる争いを呼ぶ。世界は混乱していた。

神はこの事に怒り、地上から人間を一掃させんと、自身の身を削って魔物達を生み出し、人々を根絶やしにしようと考えた。

しかし、すべてが神の思惑通りにはいかなかった。

おびただしい数の魔物達を前に、互いに争い続けてきた人々が手を取り合うのにそう時間はかからなかった。

そう、人々は神に立ち向かったのだ。神は困惑した。人々の力は神の予想をはるかに上回り、生み出された魔物達は次々と数を減らしていった。

そしてついに神が地上に現れる。その禍々しい姿に、人は恐怖を抱き、とうとう形勢は逆転してしまった。

「もう勝ち目はない」

「我々は神に滅ぼされる運命なのか」

おそらく誰もがそう思ったであろう、人々が諦めの色へと染まり、大空を深く、暗い闇が覆い尽くすまさにその瞬間、一筋の光と紅蓮の炎を纏い、彼は現れた。

英雄、竜騎士ラディアスであった。神のもたらした奇跡の力、人知を越えた魔力の結晶、『竜の宝玉』と炎の神剣『レーヴァテイン』を掲げ、彼は果敢に神へと戦いを挑んだ。

だが、ラディアスがいくら渾身の一撃を叩きこもうとも、神が地に伏すことはなかった。

神はラディアスに告げる。

「やはり不完全だな、人間よ、お前の持つ宝玉、確かに我に齒向かうだけの力は与えたようだ。しかし、それだけでは足りないようだ」

そう、宝玉は五つ必要だった。

無論ラディアスもその事は承知の上であつたが、五つ目の宝玉はどうしても手に入れる事が出来なかった。

万に一つの可能性にかけて戦いに挑んだが、やはり神と同等の力を発揮する事は叶わなかった。

戦いが長引くにつれ、人々は疲弊し、集中力を欠き、士気は下がって行く一方だった。それはラディアスも例外ではなく、彼自身、体力の限界は目前に迫っていた。

「ラディアスが我々に残された最後の希望だ」

「彼が倒れば今度こそおしまいだ」

口には出さずとも、皆そう思っていたに違いない、ラディアスもまた、人々の願いを理解していた。

この時、己の勝利を確信していた神はラディアスに取引を持ちかけた。

「人間よ、お前はすでに人を超越した存在だ。我を相手にここまで戦い抜いたのも実に見事だと言えよう。

取るに足らない小さき者共と一緒に滅ぼしてしまうのは、我としても少々忍びない。

我と共に新しい世界を創るというのはどうだ？」

それは冷酷な神が見せた最初で最後の恩恵だった。

しかし、その甘い囁きはラディアスには届かなかった。彼は一片の迷いもなく答える。

「あなたにとって我々人間は小さく、確かに取るに足らない存在だろう、だが決して邪悪なだけではなく、時には手を取り合い奇跡さえも起こす人間は、滅ぼされるべき者ではない。」

「神よ、あなたの支配は今、この時を持って終わる。私は……こちらにつく！」

その一言に人々は喚起の声を上げ、逆に神の怒りは頂点に達した。この世のすべてを消し去らんとばかりに、神は怒りの剣を振り上げる。

「愚かなる人間よ、自ら死を選ぶと言うのならそれもよからう、神である我の意思に従わず、齒向かい続けた事を冥府で悔やむのだな」

そうして神は、地上に生きるすべての者に狙いを定め、かざした

巨大な刃を振り下ろす。

刹那、素早く行動を起こしたラディアスによって放たれた四つの宝玉の力が神の一撃をどうにか防ぐ。

今にも砕け散りそうな宝玉と神剣を前に、神は高らかに嘲笑を向けた。

宝玉が力を失ってしまえばすべてが終わる。

人々は祈るしかなかった。誰もがラディアスに願いを捧げ、彼と神とのやり取りを見守ることしか出来ない。

しかしこの時、ラディアスにはわかっていた。現時点で己の力を出し尽くしても、神を滅ぼすのは不可能だと。

ではどうする？やはり全能の神の前では、人は屈するしかないのだろうか？

否、そうではなかった。

ラディアスには『切り札』があった。それは同時に、世界を救う最後の手段でもある。

己の命を犠牲に人々を、豊かな大地を救う諸刃の剣。その覚悟が彼にはあったのだ。

英雄と呼ばれた男は、自身の魂を五つ目の宝玉へと見立て、神を地中深くへと封印する策をとった。

「そうだ、他に道はない、たとえ未来永劫、神を地中に繋ぎ止めるのは無理だとしても、私はやらなければならない」

熱く固い決意と共に、炎の神剣『レーヴァテイン』が、ラディア

スの胸に深々と突き立てられる。流れ出る生命の雫一滴一滴に力を込めて、彼は神への最後の抵抗を見せた。

まばゆい閃光と魂から溢れ出る聖なる炎が、大空に轟く。さすがの神も、ラディアスの捨て身の猛攻に耐え切れずに、全てを飲み込まんとして大口を開けた地の底へと押し込まれていく。

神は人間達への憎しみとラディアスへの復讐を叫び続けていたが、やがてその声は遠くなり、気配も薄れ、ラディアスの封印は完全に神を地上から消し去った……………

戦いの後には四つの宝玉と、刃の折れた神剣しか残らなかったという。

それ以来、ラディアスの姿を見た者はおらず、また、その屍も見つからなかった。

こうして人々は、束の間の平穏を手に入れ、彼を称え続けた。

その後、一人の英雄の物語は、悠久の時を経た今でも、伝説となつて人々の間に語り継がれている……………

プロローグ（後書き）

まずは呼んで頂いた事に深くお礼を申し上げます。どうもありがとうございます。

もし興味を持って頂けたなら、ぜひ続きもご覧になって頂きたいです。

第一幕 邂逅（前書き）

かつての大戦から数百年の時を越え、今一人の騎士の物語が幕を開ける。

ぜひぜひ、最後までよろしくお願いします。

第一幕 邂逅

第一幕 邂逅

時は過ぎ、再びフォルティアの地。

大陸の東を治める帝国ダルゼウス。大陸の西を治める王国クルニール。

世界はこの二つの国の下、目立った争いもなく平穏な日々を送っていた。

しかし近年、この二つの国家の間に不穏な空気が流れ出した。始まりは東西の国境を警備する兵が、謎の失踪を遂げた事件だった。この報告を受けたダルゼウスの皇帝は不審に思い、再三にわたって調査隊を派遣するが、兵士は次々と姿を消していった。

程なくして、各地でモンスターの大量発生が確認され、帝国は部隊を出動させてこれの殲滅に当たる。また、クルニール王国にも協力を仰ぐ為に使いを出したのだが、使いが戻る事はなく、王国との外交は、完全に途絶えてしまう。

ダルゼウス領、ルフォート。この地には神剣が眠る祠があると言われ、厳重な警備が配置され、これの保管に努めてきた。だが最近、この祠にモンスターが次々と集まって来ているという報告を受け、帝国騎士団第二小隊に出撃命令が下った。

この部隊の隊長を務めるのが、騎士ヘクターだ。彼は、たとえ魔物達がどれだけ現れようと、帝国において二番手の実力を誇る自分達が、烏合の衆に遅れを取る事はないと信じて疑わず、封印の地へ赴く。

彼の物語は、ここから始まる。

「それにしても不思議だよなあ」

封印の地へと向かう帝国騎士団第二部隊が、丸一日かけて草原を抜け、青々と茂った樹木が密集する広大な森に差し掛かった頃、一人の騎士が、ヘクターに声をかけた。

「どうした？ダリル」

ヘクターが聞き返すと、ダリルと呼ばれた男はこう続ける。

「この辺りは代々、サラマンディア族が護っている場所だろ？なら俺たちが遙か遠くのダルゼウスから遠征に来なくても、やつらが魔物と戦えばいい話じゃないか」

ダリルは後続の兵士たちに「そうだよな？」と同意を求める。突然話題を振られて戸惑う者が大半だが、中には彼の意見にうんうんとうなずく者もいた。

「おいダリル、何を言っているんだ。ルフオートだって帝国の領土だろ、彼らが困っているなら俺達が手助けをするのは当たり前じゃないか」

溜息まじりに、ヘクターはダリルをたしなめた。先程うなずいていた兵士もバツが悪そうにうつむく。

「それに族長からの伝令によると、里の若い衆が今留守にっていて、魔物達とやりあうだけの戦力は残ってないそうだ」

そう言っただリルの方を見ると、彼は「やれやれ」と首を横に二、三度振ってから、

「てことは結局、俺達だけで戦うのか、陛下もそれわかってて命令出したんだろ？いつもいつもこき使ってくれるよな」

吐き捨てるように愚痴を漏らす。どうやら今回の任務がいささか気に入らない様子だ。

「仕方ないさ、それに將軍なんて今頃最果てのアラス地方だろ？そ

「う考えると、俺たちはまだマシな方さ」

今度はなだめる様に言い聞かせる。

「それにほら、そろそろだぞ。見えてきた」

二、三キロ先に、巨大な岩山が姿を現していた。この岩山の麓に封印の地への入り口があり、一向はそこを拠点として防衛線を張る事にした。

「しかし、魔物共も何を考えてこんな所に集まって来るんだ？」

兵士達が戦いの準備を整え、ヘクターが兵の配置等の戦略を練っている、またもダリルが不機嫌そうに疑問を投げかけてきた。

「さあな、奴らの考えなんて想像も付かないよ、それよりもダリル、腕は鈍ってないだろうな？」

ヘクターがやや挑発気味に問いかけると、ダリルも冗談まじりに「お前ほどじゃないさ」と言つて、二人は笑い合う。

ヘクターとダリルは幼い頃から一緒だった。ヘクターと違い、ダリルは両親を早くに亡くした為、街の教会に身を寄せて育ったが、それを理由に辛い素振りなどを見せたりはしない陽気で威勢の良い性格だ。外見を取ってもまるで正反对で、ダリルは金髪を短くそろえ、背丈もそれほど高い方ではない。

一方ヘクターは、黒髪を少し長めに伸ばし、身長はかなり高い方だった。そして陽気な一面もあるが、ダリル程ではなく、一見落ち着いた大人の雰囲気漂う男だ。

はたから見れば、実に不釣り合いに見える二人だが、ダリルはヘクターを兄のように慕い、ヘクターは少々無鉄砲なダリルを気にかけている。この信頼関係は幼い頃から変わることがなく、今も互いを支え合い、力を合わせてとうとう騎士団第二小隊の隊長、副隊長にまで登り詰めた。

帝国騎士団は、第一大隊に始まり、第二、第三から第八まで続き、部隊に属さない警備兵や、護衛兵も存在する。現在、騎士団長であ

り、第一大隊を率いる『牙狼將軍ヴァングリフ』の誘いによって、ヘクターとダリルは二十歳を迎えてすぐに騎士団に入隊した。

最初は城下の警備兵を二年、そして第一大隊で三年間ヴァングリフの下に付き、兵法を学び、腕を磨いた。その後現在の第二小隊の隊長と副隊長に任命されてから、もうすぐ一年になる。

ヘクターは軍での出世に対して興味はなかったが、自分とダリルに剣を仕込み、入隊の世話までしてくれたヴァングリフに対し、少しでも恩を返したかった。その為、与えられた任務は確実にこなし、夢中で軍務に取り組んだ。おそらくダリルも同じ想いでいることだろう。

夕暮れ時、戦いの準備を終え、各自、持ち場で息を潜めて魔物が現れるのを待っていた。

第二小隊は、ヘクターとダリルを合わせ、十四人で編成されている。これは先の二人を除いた兵士たちが、二人一組、三人一組、どちらにも対応が利き、戦闘中にヘクターが半数の六人を、残りの半数をダリルがそれぞれ分配して指示を出し、どのような戦況でも迅速に行動を起こせるという利点があるからであった。

無論、それにはヘクターとダリル双方の素早い状況判断と意思の疎通が必要であり、騎士団の中で唯一、この二人だけが扱うことを可能とした戦法だった。

「ヘクター」

少し離れた位置から、ダリルが声を低く抑えて呼びかける。ヘクターは声を出さずに視線を返して答える。

「気付いてるか？ 何かが……」

ダリルの質問の意味がイマイチ理解できないヘクターは首を横に振る。ダリルは何かせわしない様子で、しきりに周りを気にし始めた。その行動を見たヘクターは例えようの無い不安な気持ちに捕らわれるのだった。そしてダリルに習い、周りを見渡す。

空は夕暮れ時の薄紅色から夜の闇へと変わりつつあり、森はすで

に暗く、たいまつの照らす弱々しい光だけが頼りだった。ヘクター達は岩肌にはっきりと口をあけた封印の地への入り口を囲むように、やや円形に陣を組んでいた。この陣形を維持しつつ、現れる魔物達を各々が各個撃破していく。そうすれば、もし大軍に攻められて徐々に後退したとしても、最終的には入り口に皆が集まり、それぞれをカバーし合える。という作戦だ。

暗闇にじっと目を凝らして、森の中をいくら見渡しても、何の気配すら感じないし、兵士たちの様子も特に変わったところは見られない。敵の接近は確認されていないようだ。

それなのに、この胸をわし掴みにされるような不快感は一体何なのだろう？ ヘクターが少し冷静になろうと思って腰を下ろすのとはほぼ同時に、ダリルが一人の兵士の名を呼んだ。更に続けて全員に聞こえるように叫ぶ。

「囲まれているぞ！」

ヘクターは突然の出来事に混乱し、危うくバランスを崩してよろめく。それからダリルが名を呼んだ兵士を見ると、すでに二メートル程の体格をして体毛が全て抜け落ちたイノシシのようなモンスターとの交戦を始めていた。

それを皮切りに皆、一斉に剣を抜き、次々と迫り来る魔物達に切りかかっていった。

「ちいっ！」

ヘクターは舌打ちをして、隊長である自分が異変に気づかず部下たちに警告を出せなかった事を悔やむ、だが、同時に自分の至らなかった所を見事にカバーしてくれたダリルの心強さを改めて実感し、ありがたいとさえ思った。

騎士団は通常、帝国において、戦いに主眼を置いたものではあるが、市民の手助けをし、依頼があれば旅商の護衛を受け、近くの街まで送り届けたりする事もあった。

その中でも予想しない災害、すなわち賊による被害や魔物の出現

に対応し、戦闘を専門的に行う為に編成されたのが第一大隊であり、第二、第三小隊はそれを補佐する役割を担っていた。補佐と言っても大隊の援護をするだけではなく、れっきとした独立部隊であり、少数制を活かした隠密作戦や、敵陣への後方からの奇襲作戦など、様々な戦局に大いに活躍している。今日の帝国において、もはや欠かせない存在なのであった。

幾度と無く死線をくぐらねばならない事もあったが、その度にダリルや他の兵士達と力を合わせて乗り越えてきた。さらに、日頃の鍛錬を怠らない彼らにとって魔物を相手にする事はそれほど難しい事ではなかった。

ヘクターは迫り来る邪悪な者どもを次々と切り刻み、ダリルもそれに負けじと大声を張り上げて二刀一対の愛剣を振りかざし、群れの中へと突進して行く。二人の気迫に触発された兵士達も臆すること無く果敢に魔物達に立ち向かう。

やがて日が完全に沈む頃には魔物たちの勢いも収まり、ダリルよって薙ぎ払われた凶暴なサルに似た姿の魔物に、ヘクターが止めを刺す。

「こいつが最後の一匹か？」

剣にこびりついた魔物の返り血を払いながら、ダリルが尋ねる。

「ああ、そうみたいだな」

ヘクターも同じく剣に付着した血を払い落とし、兵士達の様子を伺う。

「全員無事だな」

兵士達は座り込んでいたり肩で息をしている者はいるが、傷を負っている者はいないようだ。全員の生還に胸を撫で下ろし、改めて辺りを見渡すと百はゆうに超えているであろう、おぞましい数の魔物達の死骸が辺りを埋め尽くしていた。ヘクターはその光景を見て我ながらよくこれだけの数を相手に出来たものだと感心した。

「こいつら、一体何を求めてこんなに集まってきたんだ？ それに

気配すら感じなかったのに突然湧き出たように次々と……」

ヘクターは誰に尋ねるでもなく呟いた。今回の敵は不可解な点が多すぎる。

一人考えを巡らせていると、ダリルがヘクターの肩を叩いた。

「何ブツブツ言ってるんだ？ 任務は完了したんだ。早いとこ引き上げようぜ」

朝になる前には街に着きたい。と続けてヘクターを促す。ダリルにこの事を相談しようかと思ったヘクターであったが、ここで考え込んだところで答えは見つからない。

「そうだな、行こう」

踵を返した時、ヘクターはある事を思い出した。魔物達が現れる直前、ダリルだけが異変に気付いてい。あの時、確かに周りには変わった様子は無かった。ではダリルは一体何を見たのか？ 何を感じたのだろうか？ それをダリルに聞こうとして、ヘクターが口を開きかけたのと時を同じくして、二人の前方で身支度を整えていた兵士達が突然叫び出し、口々にわめき出した。

そして、それに答えるようにメキメキと音を立てて木々を薙ぎ倒し、先に戦った魔物達を遥かに凌駕する巨大な身体から背筋の凍るような雄叫びを発し、それは現れた。

兵士達はもちろん、ヘクターらでさえもしばし動く事が出来ず、ただ目の前に現れた巨体を凝視していた。

「ド・・ラ・・ゴン」

ヘクターが声にならない声を上げた。体長はゆうに五メートルを超え、羽根の無い翼を持ち、眼は血走っていて狂気に満ちている。その獣はまさしく伝説に語られるドラゴンの姿をしていた。

「う、うわあああああ！」

パニックを起こした兵士が逃走を図り、一目散に駆け出した。それに反応したのか、ドラゴンは兵士の方を見やり、一呼吸置いて耳まで裂けた大きな口から、黒くよんだ炎を吐き出す。

黒炎は全力で走る兵士をあつという間に包み込み、声を上げる暇

も与えずに骨まで焼き尽くした。

一連の出来事にやっと我に返ったヘクターは、

「いくぞ！」

と真っ直ぐにドラゴンを見据えたままダルルに呼びかけて剣を抜く。ダルルも「ああ！」と答えて双剣を手にし、二人は同時に地を蹴った。

ドラゴンは二人の接近に気付くと長い尾を高く振り上げ、思い切り地面へと叩きつけた。地面は簡単にえぐられ、巻き上がる砂塵に視界が遮られる。ヘクターはすんでの所でそれをかわし、

「ダルル！ 無事か？」

と声をかけるが返事は返ってこない。まさかと思い、土煙の中で目を凝らしてダルルの姿を探す。するとやや後方にうつすらと彼を確認できた。どうやらダルルもうまくかわせていたようだ。しかしその事に気をとられ、ヘクターは次の一撃に対する備えを怠った。

「ヘクター！」

ダルルが危険を知らせようとしたが遅かった。先程振り下ろされたドラゴンの尾が、今度は横薙ぎにヘクターを襲う。とっさに身構えようとするが間に合わない。強い衝撃と共に彼は十メートル以上宙を舞い、一度地面をバウンドして魔物の死骸の中に突っ込んだ。幸いそれがクッションとなり、ダメージは軽減された。

すぐに体勢を立て直して仲間達を見ると、ダルルを筆頭に皆が一斉にドラゴンに切りかかって行く所だった。

迫り来る尾撃をかくぐり、続いて鋭く尖った爪撃を鮮やかに受け流したダルルの双剣が敵の首筋をとらえる。

しかし、強靱な外殻によって刃は弾かれ、彼が思わずよろけた所に今度はドラゴンの掌撃が容赦なく突き出され、ダルルはまともにそれを喰らって地面へと叩き落とされる。ヘクターは駆け寄り「大丈夫か？」と声をかけて彼の身を引き起こした。

「なんとか、だがヘクター、こりゃあヤバイぞ」

「ああ、何か策を立てないと……」

「ぎゃああああああ！」

二人の会話は、兵士の悲鳴によって遮られた。見ると兵の一人がドラゴンに身体をわし掴みにされて苦しみもがいている。更に彼を救おうとしたであろう二、三人が、まとめてドラゴンの尾と地面の板ばさみに合い、グシャツという鈍い音を立てて一瞬のうちにゆがんだ甲冑に包まれた肉塊へと成り果ててしまった。

いとも簡単に尽きてしまった仲間の命を悲しむ暇も無く、完全に恐怖に取り付かれてしまった兵士達は、もはや眼前に立ちほだかる悪魔に抗うすべも持たずに次々と力尽きていく。一人は鋭い爪により首をはねられ、一人は岩壁へと跳ね飛ばされる。鎧ごとバキバキと音をたててドラゴンに食される者さえいた。

やがてドラゴンに締め上げられて悲痛な叫びを上げていた兵士もぐったりと動かなくなり、兵士の数が半数以下に減った頃、ドラゴンは力強く翼を羽ばたかせ、逃げ惑う兵士達を先程の黒炎によってまとめてこの世から葬り去った。

「だめだ、もうだめだ……」

ヘクターは己の無力さに、そして一步も動けない臆病さをひしひしと感じながら、呆然としていた。

そして、いよいよとも言いたそうに、ドラゴンは二人の生き残りを睨みつけて大きく息を吸い込んだ。

「おい、まずいぞヘクター！」

ダリルの声が聞こえ、やっと意識が身体へと返ってきたような気がした。

「祠だ！ あそこまで走ろう」

ダリルに言われるがままヘクターは走り出す。それと同時にドラゴンが二人に向かって思い切り地獄の火炎を吹き付ける。

二人はもつれ合うように祠へと飛び込み、まさに後一步というところで灰にならずに済んだ。

「はあはあ……なんてこった、全員やられちゃった」

呼吸を荒くしたままのダリルが言う。

「何も、何も出来なかった。ただ見てるしか……」

ヘクターが自分を責めるように言うと、ダリルがヘクターの二の腕の辺りを軽くこづいて、

「馬鹿、お前だけじゃねえよ、おれも何も出来なかった。足がすくんで動けなかったんだ」

と言い、拳を握り締める。

「ヘクター、これからどうする？」

そう聞かれたヘクターは、すつと立ち上がる。

「もう、ここまで来たらただ逃げ出すわけにはいかないな」

その目は決意に満ち、恐怖の影は消え去っていた。

「あいつを倒す。みんなの仇を討とう」

「おいおい、本気か？」

ダリルは、ヘクターの唐突な意見にたじろいでいる。

「当たり前だろ、部下をみんな無くしておめおめ逃げ帰るなんて俺には出来ない。それはお前も同じだろ？」

「まあ、確かに……」

「それに、懐に入り込めれば勝機は十分にあるさ、俺たちにならできる」

「相変わらず言い出したら聞かないな、お前は」

二人は拳をコツンとぶつけ合い、笑みを浮かべる。そう、どんなに困難な状況でも二人で共に乗り越えてきた。今度もきつと乗り越えられるはずだ。ヘクターもダリルも互いを信じ、自分自身を奮い立たせた。

その時、二人の決意が固まるのを待っていたかのように祠の入り口が大きな音をたてて崩れ落ちる。

「来たな！」

ヘクターは少しも動じる様子はなく、むしろ温かく迎えるような口調だ。二人が祠の奥へと駆けて行くと、程なくして少し開けた空間にたどり着いた。辺境の小さな村ならすっぽりと入りきってしまふ位の面積を有する室内は、中央に高さ三メートル程の石碑を祭つ

であるだけで、それ以外には何も無いガランとした印象を受ける部屋だった。

「よし、ここで奴を迎え討つ」

「ここって神剣の間だろ？ バチなんて当たらねえだろうな……」

ダリルは冗談を言う余裕まで出てきたようだった。適度にリラックスしている証拠だな。とヘクターは少し安心した。

程なくして、激しい轟音と共に岩壁や天井を砕きながら、憎きドラゴンが二人のいる神剣の間へと姿を現す。

「なあヘクター、あいつのおかげで出口無くなっちゃったぜ？」

崩れ落ちた岩石によって地上への唯一の出入り口は、見事に塞がってしまっていた。

「あいつを倒してからゆっくり考えるさ」

二人は再び剣を構える。

「ダリル、覚悟はいいか？」

「当たり前だ。お前こそ怖気づくなよ」

ヘクターは口の端を少しだけ持ち上げて笑い、すぐに真剣な面持ちへと戻る。

先に動いたのはドラゴンだった。部屋中に響き渡る程の雄叫びをあげ、兵士の血で真っ赤に染まった巨大な爪を突き立てて二人に向かって突進してくる。ヘクターとダリルはそれぞれ左右に飛びのくやいなや、素早い切り返して巨竜の脇腹に強烈な一撃を見舞う。斬りつけるといっても叩き込むというのが妥当だろう。休むことなく、二人は続けざまに斬撃を繰り返す。外傷は一切見受けられないが、確実に内部、つまりドラゴンの内臓や筋組織、間接等には確実にダメージを与え、蓄積していつていけると二人は確信していた。動きを止めることなく、ダリルがヘクターに向かって叫んだ。

「ヘクター！ あれ、やれるか？」

「ああ、もちろんだ！」

そう答えた後のヘクターの合図で、二人はドラゴンを挟み込むように間合いをとり、現時点で持ち得る力を極限まで高める。やがて

ドラゴンがヘクターに狙いを絞り、深く息を吸い込んで体内に黒炎を作り出し始めた。

「まだ、まだだ！」

二人はタイミングを計る。

そして、十分にヘクターを消し去るだけの威力を備えた炎が、邪悪なる者の口から吐き出される寸前、

「今だ！」

二人は同時に飛び掛る。全力を注いだ渾身の一撃だ。ヘクターはドラゴンの顎を、ダリルは後頭部を思い切り打ち上げる。そしてヘクターは勢いを殺さずに降下し、敵の大腿部に剣を突き刺して着地した。

これにはドラゴンもたまらずにうめき声を漏らし、黒炎を弱々しく吐き出しながら地面へと倒れ込んだ。その隙を逃さずにダリルは「うっうおおおおお！」と声を張りあげながら、全体重を乗せた双剣をドラゴンの赤黒い眼球めがけて深々と突き立てる。

「グウオオオオオオ」

ドラゴンの悲痛に溢れた鳴き声が室内に響き、やがて巨獣はその動きを止めた。

「やった……はは、やったぞ！ヘクター！」

やや離れた位置にいるヘクターに、喜びを全身で伝えようとするダリル。

「やった……」

ヘクターにも思わず笑みがこぼれ、ダリルの元へ歩み寄ろうと踏み出したその時、突如として神剣の間の壁が何者かによって突き破られ、黒く大きな影がダリルめがけて突進して来た。影によって繰り出された一撃が、ダリルの身体を背後から見事に貫く。

「な、なに……」

ダリルは避ける事も、それどころか振り返る事さえ出来ずに、自分の身体を貫通している鋭く光った爪を不思議そうに見て、

「ヘクター……にげ……ろ」

と言が残してその場に崩れ落ちる。

地面に倒れ、動かなくなったダリルの背後に現れたのは、「グルル」と喉を鳴らし、二人がかりで必死に退けた先のドラゴンと寸分違わぬ姿をしていた。

全てを出し尽くし、やっと倒したハズのドラゴンがもう一体現れたのだ。

「そんな、ダリル……ダリルー！」

いくら叫んでも、ダリルがヘクターの声に答える事は無かった。

「うああああああ！」

怒りに任せて剣を構え、ドラゴンへと向かっていく。しかし、まだドラゴンとは距離があるはずのヘクターの肩に、突然強い痛みが走る。そして次の瞬間、彼は大きく弾き飛ばされ、部屋の中央にある石碑に激突した。

「ぐあつ！」

石碑は粉々に砕け、ヘクターは口から赤い液体を二、三度に分けて吐き出した。口内に鉄の味が広がり、息もできないまま苦しみもがく。何が起きたのか把握するには時間がかったが、顔を上げて敵の姿を確認すると、謎はすぐに解けた。ダリルを手にかけた新手のドラゴンから少し離れた位置に、片方の目に二本の剣が刺さったままの手負いのドラゴンがよろめきながらもヘクターに向かって足を進めていたのだった。

「あいつ……死んでなかったのか、くっ！」

脇腹に激痛が走る。どうやら肋骨が何本か折れているようだ。折れた肋骨が内臓に刺さっているのか呼吸も満足に出来ない。

「死んで……死んでたまるか！ みんなの仇を、ダリルの仇を……」
痛みをこらえ、立ち上がるうとしたヘクターの手に見慣れない剣の柄が当たった。相当昔の物なのだろうか、錆だらけで刀身は綺麗に折れてしまっている。しかし、愛用の剣はドラゴンの足元にあり、とても取りに行くなんて事は出来ない。

「まさか、これが神剣か？」

選択の余地は無かった。ワラにもすぎる想いで折れた神剣を手にしてヘクターは立ち上がる。かつては両刃の長剣だったのだろう、しかし、今では突くことも斬ることも叶わないただの鉄の塊を一方のドラゴンに向かって振り下ろす。しかし、予想通りか、期待はずれだったのか、ドラゴンの硬い鱗には傷ひとつ付けることは出来ず、逆に相手の鋭い爪が鎧ごとヘクターの肉をえぐり、彼は再び数メートル吹き飛ばされた。

もう立ち上がる力も残っていない。すでに神剣はヘクターから流れ出た鮮血で真っ赤に染まっている。朦朧とする意識の中彼は呟いた。「情けないな、部下を失って自分もボロボロだ、ダリルまでも……」

守るべき者も、大切な友をも失い、自身の命も尽きようとしているこの瞬間、彼が望んだのは『力』だった。それさえあればたとえ何が自分達を襲っても、どんなに困難な状況に立たされても大切なものを護る事が出来る。『力』が、『力』が欲しい。家族を、友人を、出来るならば敵に怯える全ての人々を護り抜ける『力』が……

「ヘクター……ヘクターよ、まだ生きたいか？」

誰かが耳元で囁く。

「だ、誰……だ？」

「答えるのだ。私と契約を交わし、まだ生きたいか？」

「契・・約？」

「そうだ、私とお前の、魂の契約だ」

声は、ヘクターの血を浴びた神剣から聞こえてくるようだ。

「お前が私を呼んだのだ。お前にはその資格がある」

見上げると二体のドラゴンはすぐ近くに迫り、後から現れた方のドラゴンは、黒炎を吐き出そうと四つん這いになり、力を蓄えている。

「契約すれば……あいつらに……勝てるのか？」

「無論だ。あのような者など、取るに足らん存在だ。」

ドラゴンは今にも炎を吐き出しそうな素振りです。ヘクターを睨みつけている。

「さあ選ぶのだ。契約か、ここで果てるか、どちらか一つを」

ヘクターは少し笑ってから、

「決まってるさ……するよ、契約……だ」

瞬間、吐き出された黒炎がヘクターに迫る。しかし、その悪意に満ちた炎がヘクターの身を焼き尽くす事は無かった。突如、神剣から火柱が立ち昇りヘクターを包み込む。消えかかっていた命の灯火が再び燃え上がるのを彼は確かに感じていた。暖かく、強い意志を持った炎だ。

敵から放たれた黒炎は、燃え盛る火柱によって瞬く間に消滅した。予想だにしなかった出来事に、二体のドラゴンは声を荒げ、今度は同時に黒炎を吐き出した。二つの黒い炎はやがて交わり、一筋の強力な炎となってヘクターへと向けられる。

ヘクターはとっさに立ち上がるうとした時、先程自分を護ってくれていた火柱が消えている事に気付く。そして辺りを見渡すと、いつの間にか彼の頭上に赤き翼を持った巨竜が姿を現していた。

巨竜はゆつくりとヘクターの元へと舞い降り、片翼を大きく広げて黒炎をいとも簡単に受け止めた。

「お前も、ドラゴン……なのか？」

ヘクターは恐る恐る尋ねる。すると耳からではなく直接頭の中へと語りかけるように、先程聞いたものと同じ声が答えた。

「その通りだ。私は炎の神剣『レーヴァテイン』に宿りしドラゴンだが、お前がドラゴンだと思っているあの二体は、私とは異なる者だ」

「異なる者？」

ヘクターは声に出して聞き返す。

「そう、竜であって竜で無い者、ドラゴンになり得なかった者。奴らは『ワイバーン』だ」

「ワイ……バーン」

聞き慣れない言葉にヘクターは戸惑う。

「外見こそ似てはいるが中身は全く別のものだ。あのような邪悪な者と私と一緒にされるのは実に不愉快なのでな」

赤き翼のドラゴンはゆっくりと振り返る。

「あれは滅ぼすべき存在、そしてそれを実行するのが私の使命だ」
力を込めて言い放つ。次の瞬間、赤きドラゴンの眼前に円形の魔方阵がうつすらと浮かび上がる。やがてそれは時を刻む針のようにゆっくりと、次第に速度を上げて回転し始めた。

「よく見ておくのだヘクター。これこそ真のドラゴンの力。神の与えし魔力が引き起こす絶対的な力だ」

そう言って赤きドラゴンは、目の前の魔方阵に向かって勢いよく炎を吹き付ける。そして炎は一度魔方阵に吸収されたかと思うと大きく弾け、無数の火球へと姿を変えた。

火球は凄まじい速度でワイバーンへと向かう。何十もの数の火球が爆音と共にワイバーンの身体を貫き、蜂の巣へと変えた。

たまらず「グオオオオ」と断末魔の声を上げ、体中からどす黒い血を噴き出して片目を失ったドラゴンは岩壁をえぐりながら倒れ、今度こそピクリとも動かなくなった。

「すごい……」

その一言しか今日の前で起こった状況を語るすべをヘクターは持ち合わせてはいなかった。もう一体のドラゴンは事態が把握できず、ただただ声を荒げてこちらを見つめている。

「次はお前の番だ。私が与えた力を使い仲間の仇を討つ時だ」

ヘクターの手の中の神剣がかすかに光を帯びている。それはつい先刻までは感じられなかった力。何者にも遅れを取る事はない神剣の本来の力。そんな印象をヘクターに与えた。

「俺に、お前と同じ力が？」

ヘクターが尋ねると、ドラゴンは重々しく答える。

「そうだ、魂の契約により、お前はたった今から人にあらず、ドラゴンの魔力と人間の心を併せ持つ『竜人』として覚醒したのだ。今

この瞬間よりその命果てるまで私とお前は一心同体。私が傷つけばお前も傷つき、お前の心が苦しめば、同じ分だけ私の心も悲鳴を上げる」

「ドラゴンと一心同体か、それは簡単に死ぬわけにはいなくなつたな」

ヘクターはにわかには信じがたいと思いつつも、湧き上がる力に多少なりとも喜びを覚え、同時にもう一度生きるチャンスを与えてくれたドラゴンに感謝の意を述べる。

「礼を、言わなくてはならないな」

しかし、ドラゴンは「礼には及ばない」と返し、更にこう続ける。「私を永い眠りから解き放ったのはお前なのだ、そして神剣を依り代にしている私はお前の助けが無ければどこへ行く事も出来はしない。それでは使命を果たすことは不可能だからな」

この事にヘクターは首をかしげ、理解できないといった様子である。

「じきに分かる。それよりも今はあやつを倒すのが先だ。どうやら待ちくたびれてしまったようだぞ」

ドラゴンに促されてワイバーンの方を見やると、吼え続けるのにも飽きた様子で姿勢を低くし、勢いをつけてヘクターに向かってきた。

「さあ力を使うのだ。私を、レーヴァティンを信じるのだ。そして決して忘れるな、お前の怒りは私の怒り。我らの力は何者をもしのぐ」

言われるがまま、ヘクターは折れた神剣を構えてワイバーンに向かって駆け出した。

一閃。

ヘクターの斬撃は敵の首を根元から斬り落とし、切り口からは炎が立ち昇る。復讐の炎に身を焼かれ、邪悪なる者はその場に崩れ落ち

る。

「ダリル・・・」

仇は討った。ダリルの命を奪っていった魔物はヘクターの手により灰となってこの世から消滅した。しかし、ヘクターの怒りは収まらない。ダリルが帰ってくる訳でもない。まだ熱の残る神剣を地面へと落とし、倒れこんだヘクターの意識は薄れていく。消え行く意識の中、ドラゴンの声がかすかに耳に残る。

「ヘクターよ、超えるべき試練は始まったばかりだ。決してくじけるな、意思を強く持ち、現実と向き合おうのだ」

ドラゴンは再び、火柱へと姿を変え、神剣『レーヴァテイン』へと吸い込まれていく。

「お前は……」

「私の名はレーヴァ。これからお前と運命を共にする者だ」

神剣へと吸い込まれていく力強い炎をおぼるげに見つめながら、ヘクターは深い眠りに落ちていった。

第一幕 邂逅（後書き）

最後まで読んで頂き、心からの御礼を申し上げます。次話もぜひお願いします。

第二幕 禍根（前書き）

目の前で部下を失い、親友をも失ったヘクター。次に彼を待ち受ける悲劇とは……

第二幕 禍根

第二幕 禍根

目を覚ました時、ヘクターは自宅のベッドに横になっていた。傍らでは妻のソフィアが心配そうに彼の顔を覗き込んでいる。

「よかった、気が付いたのね」

「ソフィア、俺は……」

起き上がろうとするヘクターを、ソフィアは「まだ起きてはだめよ」と言って静止する。

「あなたたちが予定の帰還時刻になっても戻らなかったのを陛下がご心配なさってね、もしもの事に備えて救援を送ったの。そしてあなたは助けられたのよ」

「他に……生存者は？」

ソフィアは何も言わずに首を横に振った。

「ダリルは……あいつはどうなったんだ？」

わかっていながらもヘクターはさすがのようにしてソフィアに問う。彼女はとても言いづらそうにうつむいていたが、やがて決心してその重い口を開く。

「ダリルの遺体も……確認されたわ」

そこまで言って彼女は口ごもった。

「くっ……ダリル……ちくしょう……」

ヘクターは嗚咽の声を漏らす。そしてもう一度「ちくしょう！」と叫び、シーツを強く握り締めた。

全て夢であって欲しかった。城へ戻ればいつものようにダリルがいて、いつものように笑い合う。そんなヘクターのささやかな願いはこの時、跡形も無く砕け散ったのだった。

「ヘクター……」

ソフィアは血がにじみそうな程強く握り締めたヘクターの拳を、

細く弱々しい両手でやさしく包み込む。

「あなたのせいではないわ」

ヘクターはソフィアの胸にその身を預け、しばらくの間彼女の優しさに甘んじていた。

ヘクターがソフィアと出会ったのは三年前、ヴァングリフ將軍の率いる第一大隊でダリルと二人で副隊長を務めている頃だった。

その頃はまだ二人とも新米で、毎晩のように將軍に連れられて城下にある酒場へと入り浸っていた。ダリルはめっぽう酒に強い方で、將軍と一緒に夜明けまで騒ぎ続けていたが、ヘクターはいえば、ほんの一杯の葡萄酒を口にただけで顔は紅潮し、気付けばテーブルに伏して死んだように眠ってしまう程アルコールには弱かった。もちろん、そんな彼にも將軍は酒を勧め、ダリルも悪ノリして次々と注文を繰り返す。

ほぼ毎日繰り返し返されたその宴は、ヘクターにとっては苦痛を強いられるだけだったのかもしれないが、彼が逃げ出さずに通い続けた理由がソフィアだった。

彼女は当時その酒場で働いていて、酔いつぶれたヘクターをいつも優しく介抱してくれていた。その様子を見た將軍やダリルが茶々を入れてくることもしばしばあったが、日に日にソフィアに対するヘクターの想いは強く、確かなものへと変わっていった。

それから一年後、第二小隊の隊長へと任命されたその日のうちに、ヘクターは彼女に想いを告げ、結婚を申し込んだ。そして数日の後に二人の結婚式は取り行われた。決して盛大なものではなかったが、ヘクターにとってこの上ない幸せに包まれた日だった。

しかし、結婚してからというもの、部下の教育や各担当地域への遠征といった隊長としての激務に追われ、二人でゆっくり過ごす暇も無いまま二年の月日が流れた。このままではどんな不満を言われても仕方ない。ヘクターはそう思っていたが、ソフィアは決して愚痴をこぼす事無く彼を支え続けた。

過去に一度、ヘクターは彼女に仕事ばかりでろくに二人の時間を作れない事を詫びた事があった。だが彼女はいつものように微笑み、「謝る事なんて無いわ」と返し、更に、

「たとえ二人の時間が無くても、あなたが帰らない日が続いても、私は辛くなど無いの。ただ無事に私の所へ戻ってきてくれるなら私は他に何も望まないから」

と続けた。その事があってから、ヘクターは彼女だけは何があっても守りぬくと心に誓い、より一層己を鍛え、力を欲した。大切な人を護り続ける力を。

外はあいにくの大雨であつたが、ヘクターは午前中の間に、ダリルが幼い頃身を寄せていた教会に向かった。そこで神父の許しを得て霊安室へと入る。そこには名誉騎士の鎧を着せられたダリルが棺の中で静かに横たわり、周りには色とりどりの美しい花が敷き詰められていた。

「ダリル……遅くなつてすまない」

ヘクターは街の花売りから買った一輪の白い花をダリルの両手の上に乗せた。

その後、しばし黙っていたがやがて語りかけるように口を開く。

「お前が名誉騎士か、隊長の俺を差し置いて將軍よりも上になつちまつたな」

ヘクターは喋り続けた。幼い頃によく一緒に悪戯をしてヘクターの両親に叱られた事、二人で城下の見張りをしていた頃の事。二人でレミアム山の怪鳥討伐に出掛け、敵に圧倒されていたところを將軍に救われ、九死に一生を得たこと。喋つて喋つて、そして無理やり笑った。やがて笑っているハズのヘクターの頬を一筋の涙が伝う。

「くそ……何が名誉騎士だ。こんな鎧が今更何を護ってくれる?」

……

ダリルは何も言わない。今も、この先もずっと。彼がヘクターに語りかける事も、共に笑い合うことも無い。拭つても拭つても溢れて

くる涙が更に涙を誘う。

「ダリル、俺に力が無かったせいでお前を守ることが出来なかった……すまない」

声は引きつり、目は焼きついたように熱い。ヘクターはその場に膝をついて泣き続けた。やがて、いつからか室内に差し込む光に気付いて彼は顔を上げた。いつの間にか雨は止んでいた。厚い雲は晴れ、降り注ぐ日差しは複雑に作り込まれたステンドグラスを通り抜け、七色の光となってヘクターとダリルを照らしている。

ヘクターは導かれるように立ち上がって瞳を閉じる。その暖かな光はヘクターに巢食った悲しみを洗い流してくれるような気がして、とても心地よいものだった。

「ヘクター」

一瞬、ダリルに呼ばれたような気がして彼を見たが、先程と変わらずただ静かに横たわったままだった。しかし、ヘクターにはダリルが少しだけ、ほんの少しだけ笑ってくれたような気がした。

「ダリル……ありがとう。安らかに眠ってくれ」

最後にダリルの手を強く握った後、ヘクターはダリルの元を後にした。

その日の夕刻、一人の兵士が家に訪ねて来て、皇帝からの伝令をヘクターに伝えた。内容は、明日皇帝の元へと出向き、今回の事件の詳細を聞かせて欲しいとの事だった。

事件の詳細を聞きたがっているのは皇帝だけでなく、騎士団の間たちも同様のようで、伝令係の兵士はヘクターに何か聞きたそうに口ごもっていたが、言い出せなかったのだろうか、とうとう何も聞かずに立ち去って行った。やはり皆、真相を知りたいという気持ちはあるのだろう。

しかし、話しても信じてもらえるのだろうか？

幸い、ワイバーンの死骸は多くの兵士達が目撃していたので、小隊の全滅に不信感を抱く者はいないようだったが、問題はなぜヘク

ターだけが無事でいられたのか、兵士達の中には死体すら発見されなかった者もいて、ダリルまでもが無残な姿で発見されたのにも関わらず、ヘクターだけは無傷だった。

最初にヘクターを発見した兵士は、鎧をきれいに切り刻まれているのに外傷は一切見受けられず、ただ気を失っているだけの彼の姿を見て全く状況が掴めなかったという。

おそらく、この国の誰一人としても予想は出来ないだろう。ヘクターが神剣に眠るドラゴンと契約を結び、二対ものワイバーンをもとも簡単に倒してしまった事など、一体誰が想像できるというのか。仮に信じてもらえたとしても、証明になるものが無い。せめて神剣だけでも持ち帰っていたら……しかし、あのボロボロの剣を神剣だと言っても、それもまた信憑性に欠けるだろう。などと考え込みながら寝室へと戻る。そして窓辺に置かれた木製の椅子に腰掛けて、「あのドラゴンがもう一度現れてくれたら……」

とヘクターがボソリと呟いた時、

「今私が姿を現したら、お前の妻は卒倒してしまうだろうな」

聞き覚えのある声がヘクターの一人言に答えた。思わず「そうだな」と答えかけたが、すぐにはつとして室内を見回す。すると先程まで自分が横になっていたベッドのすぐ脇、大人の腰の高さぐらいの棚の上に、刃は折れ、柄や鍔は錆付いている一見ガラクタにしか見えない剣が置かれていた。

だが、ヘクターにはこの剣がガラクタでは無い事はすぐにわかった。あの神剣だ。そしてこの声は圧倒的な力の元にワイバーンをこの世から消し去った赤き翼のドラゴン、レーヴァの声だ。

「な、なんで……いつの間に」

驚いて立ち上がり、ヘクターは剣へと駆け寄る。

「何を驚いている？ 言ったハズだ。私とお前は一心同体だと。それは互いの命が果てるまで決して変わる事は無い」

ソフィアも先程の兵士も、剣の事は何も言わなかった。それ以前にヘクターの記憶では、目を覚ましてから部屋を出るまでここには

何も無かった。

「一体どうやって、ルフォートからここまで飛んで来たとも言っ
のか？」

「私は剣に宿る者だ。自ら何処かへと移動する事は出来ない。だが
お前が私を必要とした時、私と神剣を呼んだ時、たとえ地の果てか
らでも私はお前の元へと現れる」

「じゃあさつき俺が、この剣とお前がいたら、と思ったから、ここ
に現れたという事なのか？」

「今回はそういう事になるな」

「今回はって・・・」

ずいぶんとあいまいな返答にヘクターは困惑を隠せない。だが、
ドラゴンの言うことは事実だと認めざるを得ないだろう。現に今、
ここに神剣は存在しているのだから。

その時、ソフィアがおもむろに室内へと入ってきた。

「ヘクター？ 誰と話してるの？」

レーヴァと会話していたヘクターの声を聞いたのだろう。しかし、
まさか剣の中のドラゴンと話していた。などとは口が裂けても言え
ない。

「ん？ いや、ちょ、ちよつと一人言を……」

どぎまぎしながら答えるヘクターの姿はこの時、ソフィアにはた
だの挙動不審にしか見えなかった。

「大丈夫？」

怪訝そうな表情でソフィアはヘクターの顔をのぞき込む。

「だ、大丈夫だよ」

「そう？ ならいいけど……それは？」

ソフィアは「いつ持ってきたの？」と続けて、棚の上にある錆びた
剣を指差した。やはり彼女も神剣がここにある事は知らなかったよ
うだ。

「やっぱり本当なのか……」

神剣にそつと触れ、ヘクターは先程のドラゴンの言った事を思い

出す。

「え？ なに？」

ことごとく彼の一人言を拾い上げるソフィアに、ヘクターは更にドモリ始める。

「え？ あ、いや、な、なんでもない！ ホントになんでもないんだ。これはさっきの部下がさ、持ってきてくれたんだよ」

ソフィアは眉間にしわを寄せ、まったく事態が理解できないといった様子でヘクターを見ている。

「ま、まあいいじゃないか、それより夕食の準備は？ 良かったら手伝うよ」

「これからよ、でもあなたはまだ病み上がりでしょ？」

ヘクターは何とか話題をそらしながら、ソフィアを部屋から強引に押し出す。

「いいんだいいんだ、もうすっかり良くなったよ」

でも、とヘクターの身を案じるソフィアの両肩を掴み、一度だけ神剣の方をちらつと振り返った後、部屋を後にする。一部始終を黙って聞いていた剣の中のレーヴァは、「忙しい男だな」と思い、少しだけ笑った。

その日、何ヶ月ぶりにヘクターとソフィアは夕食を共にした。そして、少し外を散歩して色々な話を話した。だがソフィアは今回の任務の事も、ダリルの事さえも聞かなかった。いつか、ヘクターから話してくれるのを待とう。それは彼女の思いやりでもあり、深い愛の証でもあった。

ヘクターはレーヴァの事を彼女に話すべきか否か悩んだが、結局話すのをやめた。自分自身、まだレーヴァの事をちゃんと理解していない気がしたし、なにより彼女を混乱させたくなかった。ヘクターもまた、彼女を思いやつての事だった。

その後、家に帰り温かいスープを飲んだ後、二人は眠りについた。

夜も更けた頃、ヘクターは誰かの呼ぶ声で目を覚ました。

「ヘクター、ヘクターよ」

目を開け、棚の上の神剣を見るとかすかに赤い光を放っている。

「ヘクター、聞こえるか？」

「ああ、聞こえてるよ。どうした？」

ソフィアを起こしてしまわないように声を小さくして、ヘクターは答えた。

「何か変だ、この辺り一帯の大気が魔力を帯びている」

「魔力？ それって何かマズイ事なのか？」

眠たい目をこすり、ベッドから起き上がりながらヘクターが言った。

「ああ、普通はこんなに魔力が密集するなどそうそう有り得る事ではない」

レーヴァがそう言った直後、ヘクターが窓の外に赤く燃え上がる炎を見た。

「あれは……」

窓を開けて身を乗り出して確認すると、彼の不安は的中した。

「城が燃えている！」

はじかれたようにヘクターは部屋を飛び出した。レーヴァが何か言いかけていたが、この時のヘクターの耳には入らなかった。

城に近づくにつれて多くの市民の悲鳴と、彼らを非難させる警護兵たちの声が聞こえてきた。ヘクターはその中の一人に声をかける。「どうした？ 一体何があったんだ！」

まだ新米なのだろうか、彼の身体はかすかに震えていた。

「敵襲です！ 突然多くの敵兵が城に現れたんです！」

ヘクターが「魔物ではないのか？ 山賊か？」と聞くと、その兵士はとても言いづらそうに言った。

「クルニール……王国軍です」

「な……なに？」

ヘクターの背筋に何か冷たいものが感じられた。

「それは確かか？ 間違いないのか？」

兵士の両肩を揺すつてもう一度確かめるも、兵士は黙ってうなずくだけだった。ヘクターは再び走り出した。

「なぜ、なぜ王国軍が！」

ヘクターは信じられない気持ちでいっぱいだった。ヘクターの知りうる限り、国家間の争いなどもう何十年も無かったハズだ。それに西の大国クルニールとはずっと外交を行い、常に協力し合ってきた。そのクルニールがなぜ帝国に攻め込んでくるのだろうか？

とても頭が働かない。徐々に膨れ上がりつつある嫌な予感を胸にヘクターは城へと急いだ。

城門は開け放たれていた。そこをくぐって中に入った瞬間、ヘクターの目には確かにクルニールの紋章が掘り込まれた甲冑に身を包んだ兵士の姿が飛び込んできた。更にヘクターを驚かせたのは、その兵士たちの持つ異様な雰囲気だった。表情には生気が無く、敵国を攻め落とす程の気迫も感じられない。中にはその身に剣が突き刺さっていたり、腕を丸ごと切り落とされているにも関わらずに、少しも苦しむ様子を見せず向かって来る者もいた。その不気味さに帝国の騎士達は震え上がり、防衛線は破られる一方であった。

「なんだ……なんなんだこいつらは」

ヘクターは引きつった声を漏らし、とつさに足元に落ちていた直槍を拾い上げて構える。そして思い切り勢いをつけて敵兵の一人に不意打ちを喰らわせた。

「ヘクター様！」

その場で戦っていた兵士達はヘクターに駆け寄り、状況の説明を始めた。

その兵士の報告によると、つい先刻、激しい衝撃と共に裏門を破壊した敵兵が城へとなだれ込んできたという。不意を突かれた騎士団は將軍の不在もあって対応が遅れ、火の手は一気に城中に広がった。

「現在、この正門は我々がおさえ、敵の進入経路である裏門では第

三小隊が奮戦しております」

「陛下は、陛下は無事なのか？」

「はい、まだ内部への進入を許してはいません。万が一突破されても親衛隊が守りを固めています」

ヘクターはそつと胸を撫で下ろす。

「そうか、敵の数は？」

「おそらく、三十人ほどの部隊だと思われます」

「三十？」

ヘクターは思わず聞き返した。

少な過ぎる。いくら將軍が不在で、戦力が乏しいとはいえ、仮にも帝国騎士団がたった三十人程度の部隊に遅れをとるなど・・・何か理由があるのかと兵士に尋ねると、彼は先程ヘクターが吹き飛ばした敵兵を指差し、

「あれです……」

と答えた。そして言われるがままにヘクターがそちらを見ると、途端に彼は絶句し、我が目を疑った。ヘクターの不意打ちによって頭部を破壊され、おそらく再起不能とされていた敵兵が、明らかに陥没した頭部から大量の血を流しながらゆっくりと立ち上がり、なおもこちらに向かって来ていた。

「あ……あ……」

ヘクターは全く事態が飲み込めない。するとそれを察した部下が、「ご覧の通りです。我々が何度剣で切り裂いても、何度槍で突き刺しても、奴らはああやって起き上がり向かってくるのです。私も気が変になりそうです……」

部下の身体はひどく硬直し、足はガタガタと震えを刻んでいた。その間にも生ける屍と化したクルニールの兵士達は着々とヘクター達との距離を詰める。

「くっ、何なんだこいつらは！」

ヘクターは迫り来るアンデッド達の群れの中へと飛び込み、手にした直槍で一人、二人と次々に弾き飛ばしていくが、打てど払えど

クルニール兵が数を減らす事は無かった。やがてヘクターの身にも疲労の色が見え始め、不意に横から腕を掴まれて動きを止めてしまった。

「しまった！」

更に他の片腕を失ったクルニール兵が正面からヘクターに迫り、もう片方の手に持った剣を振り下ろす。それと同時にやや離れた位置から部下達の助けを求める声も聞こえる。彼らも敵兵に囲まれて万事休すと言ったところなのだろう。

「くそっ」

ヘクターは迫り来る浅黒い刃から目をそらすようにしてグツと閉じる。やがて剣はヘクターの頭部をきれいに両断する。かに思われたが、そうはならなかった。

不思議に思ったヘクターはゆっくりと目を開く、するとたった今まで目の前にいたクルニール兵達は、忽然とその姿を消していた。文字通り、跡形も残さず消えていたのだ。

「ヘクター様、これは一体……」

兵士がヘクターに尋ねたが、その理由は彼にもさっぱりわからなかった。

しばし立ち尽くしていたヘクターだったが、今度は正門へと駆け込んできた兵士に名を呼ばれて我に帰る。

「どうした？」

「大変です！ 城下に……城下に巨大なモンスターが！」

見ると、城下の方から炎が上がっているのがうつすらと確認できた。

「ちいつ、今度は城下か！」

ヘクターは再び走り出す。城下にモンスターが現れたとなると、家に一人残してきたソフィアにも危険が及ぶかもしれない。彼は無我夢中で城下へと向かった。

長い坂道を下り、短い橋を渡って所々に火の手が上がる街に入る

と、ヘクターの頭上を巨大な影が通り過ぎた。その影の正体を確認したヘクターは足を止め、目を見開く。

耳に残るかん高い雄叫び、大きな翼とその口から吐き出される漆黒の炎。

「ワイバーン……また現れたのか」

記憶に新しい、ドラゴンに似て異なる者、闇からの使者の名をヘクターはしっかりと覚えていた。だがヘクターを驚かせたのはそれだけではなく、街中を我が者顔で飛び回る凶暴な飛竜が確認できるだけで五、六体はいたことだった。そして、ワイバーンたちの被害は甚大であり、もはや彼一人で事態を解決する事など不可能であった。

その時、一体のワイバーンが街のはずれの方角へ向かって行くのが見えた。その方向にはヘクターの家があり、そこにはおそらくまだソフィアが眠っている。

「ソフィア！」

叫ぶのと同時にヘクターは駆け出していた。近隣の家屋を通り過ぎるたび、燃え上がる家から必死で脱出する者や家族の名を呼びながら泣き叫ぶ子供、その救助に当たっている兵士達の怒りの声がヘクターの耳に飛び込んできた。

「くそっ、こいつら一体何の為に」

ヘクターは、誰にも想像もつかない疑問を自分自身に投げつける。だが一っだけ彼がわかっている事は、これ以上魔物の被害により家族を、愛する者を亡くし、悲しみに打ちひしがれる人を増やしてはいけないという事だった。

ワイバーンの目をかいくぐり、やがてまだ被害を受けていない我が家へとたどり着いたヘクターは、内心ホッとして辺りの様子を伺う。どうやらまだ魔物達が迫ってきている気配は無い。

「間に合った」

そう言ってヘクターが庭を抜けようとした時、悲劇は訪れた。

上空から一体のワイバーンが飛来し、その口から大きな火球が放

たれた。やがて火球は地上へと達し、ヘクターの家を巻き込みながら彼の眼前で燃え上がる。突然の出来事になすすべも無く、燃え盛る炎を受けて崩れていく我が家をただ見つめていた。そして、手に持っていた直槍を落とし、がっくりとうなだれる。

「そんな……ソフィア」

だが次の瞬間、火の海と化した瓦礫の中から先程のワイバーンが放ったものよりも更に巨大な火球が現れ、空中のワイバーンを襲う。瞬く間に炎に包まれて邪悪な飛竜は真逆さまに落下し、灰となって消えた。

「ヘクターよ、私を捨て置いて戦いに行くとはどういうことだ」

レーヴァの声が聞こえ、かつてヘクターの家だった瓦礫の山の一部が弾け飛ぶ。そしてそこからはレーヴァが現れ、赤く輝く翼を羽ばたかせて舞い上がる。

「レ、レーヴァ！……ソフィアは、ソフィアは無事なのか？」

「安心しろ。お前の妻は幸運にも私のすぐ側にいた。あの程度の炎では傷一つ負っていないだろう」

そう言われてヘクターがレーヴァの現れた場所へと駆け寄ると、大人二人くらいがすっぽりと収まってしまふ程度の小さな円形の光があり、その中に彼の妻、ソフィアの姿もあった。

「これは……？」

彼女の傍らにあるあの折れた神剣『レーヴァテイン』が微かに光を放っていたが、ヘクターが近寄るとやがて光は収まり、円形の結界も消えた。

ヘクターはソフィアを抱き起こし、怪我を負っていないかを確認する。レーヴァの言う通り、ソフィアは全くの無傷で気を失っているだけの様だった。

「ソフィア、無事で良かった」

心底安心したヘクターが声をかけると、ソフィアはうんと呻き、息苦しそうに何度か咳込んだ。ヘクターは目を覚まさない彼女を火の手が回っていない木陰へと移動させてそっと寝かせる。そしてレ

ーヴァティンを手にしてレーヴァの元へと戻り、更に数を増やして集まってきたワイバーンに向き直る。

「レーヴァ、なぜこんなにモンスター共が集まって来るんだ？ 今まではこんな事は無かった。一体帝国の何が狙いで…」

「こやつらの狙いはこの国ではないようだ」

ヘクターの言葉を遮り、レーヴァは答える。

「この国じゃない？ 狙いは帝国ではないのか？」

「ああ、先に城を襲ったアンデッド共も今ここに集まっているワイバーン共も、恐らくはお前と私をおびき出す為に仕向けられたのだろう」

ヘクターは視線をレーヴァへと移し、

「どうということだ？」

と尋ねる。

「何者かが我々に会いたがっているようだな。手っ取り早く我々を見つける為にこの国を襲い、神剣を持っているお前を捜し出すという手を使ったのだ」

「では、クルニール王国は無関係なのか？ 城を襲ったのは王国兵ではなくただのモンスターだったと……」

するとレーヴァはしばし沈黙し、やがて確信を持ったように答えた。

「いや、おそらく城を襲ったのもワイバーンを使って街を襲ったのも、その王国とやらの者の仕業だろう」

ヘクターに戦慄が走る。

「まさか……」

「ああ、魔物たちを仕向けたのは王国の手の者と考えて間違いないだろうな」

ヘクターはそれ以上何も聞く事は出来なかった。さまざまな想いが頭を駆け巡る。それらは決して一つにまとめることは無く、ヘクターをますます混乱させた。

クルニール王国とダルゼウス帝国はおよそ三百年前、今ではただの伝説として語られる『竜騎士ラディアスの戦い』の後に設立された。

戦いの後の荒廃したフォルティアを復興へと導く為、争いの無い新しい世界を実現する為に、当時の権力者達は、二つの国が平等に大陸を治める『二国制』による世界の統率を計ったのだった。

これにより、二つの国は互いを見張りつつ、協力し合い現在まで発展してきた。双方の国は武力、商業、人材、どれをとっても甲乙つけ難く、帝国騎士団に対し王国騎兵团という刺激し合える良きライバルの存在も、武力の強化には欠かせないものとなった。

ヘクターは以前、將軍と共に王国へと招かれ、クルニール王と接見た事があった。その時にヘクターはクルニール王の人間性を垣間見たが、ダルゼウスの皇帝に勝るとも劣らない素晴らしい人物だという印象を受けたのを覚えている。

それゆえ、近年のクルニールの異変振りには納得のいかない事が多すぎた。もしレーヴァの言う通り、王国がモンスターを従えて帝国へと侵攻してきたのならば、各地で起こっているモンスターの大量発生も、王国によるダルゼウス騎士団の戦力分散の為の布石という考えに行き当たる。

全ては最悪の仮説へと繋がるのだ。

「ヘクターよ、困惑する気持ちもわからないではない。しかし今は目の前の問題を解決する方が先決だ。そこで眠っているお前の妻を護りながらこの状況を突破するのは至難の業だぞ」

上空はワイバーンが飛び回り、地上からはいつの間にか、先程城から姿を消したアンデッド兵が迫ってきていた。流石のレーヴァも敵の物量には余裕を保ってはいられないようだ。

ヘクターはこの時、手にした神剣を見て今まで以上に頼りなさを感じていた。いくら神剣といえども、今の状況においてどれだけ敵の猛攻に耐え、力を発揮し得るだろうという不安に駆られた。

「考えても仕方ない……レーヴァ、ワイバーン共は任せていいな？俺はアンデッド共を叩く」

そうだ、やるしかない。俺達がここで逃げ出せばソフィアにも帝国の人々にも更に被害が及ぶ。相手の狙いが自分達なら、この国が危険にさらされた原因が神剣を持つ俺にあるとしたら、受けて立つしかないのだ。

ヘクターは自分に言い聞かせる。

「無論だ。あやつらの相手など、私だけでも十分過ぎる位だ」

レーヴァの余裕の一言にヘクターは口の端を持ち上げてニヤリと笑う。そして二人が呪われた魔物達に先手を仕掛けようとした時、前方のやや上空に稲妻が走る。そしてその場所が次第に歪み始めた。「レーヴァ、今度はなんだ？」

得体の知れぬ力の出現にヘクターは動きを止めてレーヴァに問うが、レーヴァも驚きを隠せない様子で、

「何者かがこの空間へと無理やり入り込もうとしている。その者こそが我々を捜していた張本人だろう。だが理解できないのはこの魔力だ。これはまるで……」

そこまで言って口をつむいだ。歪みが勢いを増す中、ヘクターとレーヴァだけでなく魔物達も動きを止め、不気味な静寂が辺りを支配する。

やがて空間が裂けるように破裂し、そこから一つの間人らしき影が地上へと降り立ってゆつくりとこちらへ歩みを進めてくる。亡者共は後ずさりして道をあけ、ワイバーンも地上へと降りてその黒い影の行動を見守っているようだった。

月明かりに照らし出されたその影の正体は、全身を黒い甲冑で覆い、手には身の丈程はありそうな長い槍を持った騎士だった。顔は確認できないが、風貌からして男性だろう。

その人物が一步進むたびに金属製の鎧がガシャ、ガシャと音を立て、ヘクターの鼓動を早めていく。

「何者だ！」

ヘクターは声が震えないように叫ぶので精一杯だった。しかし黒き鎧の騎士からは返答がない。

「気をつける。あやつからはただの人間にはない強力な魔力を感じる」

「魔力？ レーヴアが使うあの力か？」

「ああ、魔力とは神が我々に与えし力。その強さ、危険さゆえに人間には最低限しか与えられなかったものだ。それゆえ我ら竜族程の力を発揮する事は叶わないのだ。しかし、あの者からは私と同様、いや、それ以上の魔力が漂ってくる」

「だが、俺はレーヴアと契約した時から魔力を与えられたんだろ？ だったらあいつもドラゴンと契約したんじゃないか？」

「今だ自分にレーヴアと同様の力を感じる事は出来ないが、ヘクターなりの解釈で疑問を投げかける。」

「確かにお前はあの時の契約により、『竜人』となつて私と同等の魔力を得た。しかし竜人へと生まれ変わったからと言って、私と同じ力を使えるわけではない、あくまでも竜人とは神剣へと魔力を注ぎ、使いこなす事が出来る者を指す。つまり、『竜族と同等の魔力を持った人間』という事なのだ」

次第に明らかにされる竜の力に、ヘクターは少しばかり混乱しそふになる。

「それ以上に、今この世界でドラゴンと魂の契約を交わしている人間は、お前一人なのだ」

「なぜだ？ なぜ言い切れるんだ？」

ヘクターは黒騎士から目をそらさずに尋ねる。レーヴアも視線を黒騎士へと向けて答えた。

「魂の契約は神剣に宿るドラゴンとしか交わすことは許されない。そして神剣はレーヴアティンを除いてこの世には存在しない」

レーヴアの言葉はヘクターを大きく動揺させた。

「じゃあ、あいつは……あいつの持つ魔力はどこから……」

「私にもそれがわからない。ただ一つ言える事は、あやつが我々に

敵意があるとすれば極めて危険な存在だ。あやつから感じる魔力は大きな負の力を帯びている」

ヘクターはゴクリと唾を飲み込んだ。甲冑の男は二人とやや距離を置いて立ち止まり、槍を構える。ヘクターもそれに習ってレーヴァティンを構えた。

「油断するな、気を抜けばこちらがやられるぞ」

ヘクターが「ああ」と答えた直後、黒騎士が動いた。

ゆつくりと槍と構えなおし、黒騎士が槍を突き出した瞬間、槍から漆黒のオーラが発生してヘクターの頬をかすめる。とっさに反応していなければ頭を串刺しにされていただろう。ヘクターは一瞬、黒騎士が槍を投げたのかと思ったがそうではないようだ。現に槍は黒騎士の手元に残っている。

「今のが奴の魔力か？」

ヘクターが問うと、レーヴァは眼前に魔方陣を浮かび上がらせながら答える。

「いや、違うな。今のは奴自身のものではない。あの槍にも何かあるようだ」

そしてレーヴァから魔方陣を介して無数の火球が放たれる。ヘクターは巻き込まれないように飛びのいて火球の行方を追った。火球は美しい軌跡を描いて一直線に黒騎士へと向かい、爆音を響かせて黒騎士を包んだ。

「直撃か？」

ヘクターは構えを解くことなく言った。そして巻き上がる土煙の中、黒騎士の姿を確認しようと目を凝らしていると、

「まだだ！」

レーヴァが珍しく声を荒げた。そして砂塵の中から先程と同じ大きな槍のオーラが衝撃波となって横薙ぎに二人に襲いかかる。

最初にレーヴァが胸を斬りつけられる。そしてヘクターはというと、レーヴァティンで黒騎士の放ったオーラを受け止めようとしたが、恐ろしいほどの衝撃にいとまたやすく跳ね飛ばされて大木に背

中を強打した。

やがて土煙が収まり黒騎士の姿が確認できるようになると、彼が全くの無傷である事が見て取れた。

「馬鹿な」

レーヴァは目を見開き、失意の声を漏らす。

「く、なんて力だ」

ヘクターは立ち上がったが、背中に激痛を感じてその場に膝を付く。

「ヘクターよ、レーヴァティンを使うのだ。こやつに私の魔力は通うしない」

レーヴァに言われ、ヘクターは神剣をを構える。そして内から溢れ出す力を折れた刀身へと込めて黒騎士に向かっていった。同時にレーヴァも翼を羽ばたかせ、その身に炎を纏い、突進する。

黒騎士は二人の同時攻撃にも全く臆することなく、左手をゆつくりかざしてレーヴァの物と同様の魔法陣を描き出した。まるで身体の全体を覆う盾のように彼の前にそびえる魔法陣は二つ、三つと重なり、三重に展開された後、回転を始めた。

ヘクターとレーヴァはそこに渾身の一撃をそれぞれぶつけるが、陣はびくともせず回転を続け、黒騎士が一度左手を振り上げてそこに黒いオーラを叩きこんだ。

三つの魔法陣は砕け散り、その反動でヘクターとレーヴァは信じられない程の力で後方へと押し返された。そして宙を舞い地面に落ちる前に、二人に無数の、先程のレーヴァのそれよりも更に多数の黒い炎の雨が降り注いだ。

「ぐうう！ これは」

ヘクターは声を上げて必死にレーヴァティンをかざし、レーヴァは炎の結界を作り出してそれぞれ防ごうとしたが、途切れる事の無い火球に全身を打ちつけられる。

やがて炎が止み、辺りが静寂を取り戻す。地面に叩きつけられたヘクターとレーヴァは起き上がることもままならない。黒騎士はな

おもゆつくりとヘクターに歩み寄り、ヘクターの脇腹を思い切り蹴り上げる。

「ぐあつ！」

二発、

「うあああ！」

三発。ヘクターは抵抗すら出来ずにされるがままだ。

その後何度蹴り上げられただろう、もはや声も出ない。黒騎士は仰向けになったヘクターの頬を踏みつけ、手にした巨大な槍を天へと掲げる。朦朧とする意識の中、ヘクターは青白く輝きだした槍をボーっと見つめていた。

ああ、おれは殺されるんだな……ソフィア、守ってやれなくてごめん。少しだけ先にダリルに会いに行くよ……

ヘクターは覚悟を決め、最後の瞬間を待った。

「ヘクター！」

だが彼にはまだ最後の瞬間は来なかった。名を呼んだ声の主はすぐにわかった。目をあげるとそこには愛する妻がいた。黒騎士の槍によって胸を貫かれ、ブラウスを真っ赤に染めた妻が……

「ソフィア……」

そして槍が引き抜かれると同時にソフィアはヘクターの上へと倒れ込む。ヘクターは彼女を抱き起こすことも出来ず、震える声を絞り出した。

「ソフィア……ソフィア……」

彼女は最後の力を振り絞ったのだろう、ヘクターの顔を優しく撫でて一言、

「ヘクター、大丈夫……夫？」

それだけ言ってから、目を閉じてぐったりと力尽きた。

「ソフィア、ソフィア！ 目を開けてくれ！ ソフィア……」

ヘクターの心は悲鳴を上げ、目からは涙が流れてくる。しかし身体は動かず、声も出ない。その姿を見ていた黒騎士は、なおも槍を掲げて今度こそ止めを刺そうと身構える。

その時、激しい突風と共に黒騎士は弾き飛ばされる。レーヴァだった。大地が震える程の雄叫びを轟かせてヘクターとソフィアを守るように黒騎士の前に立ちはだかる。しかしレーヴァもヘクター同様に身体はボロボロで、威嚇するのがやっとであった。

今、二人には勝ち目はないだろう、もう一度槍で攻撃されたら、もう一度魔力を使った攻撃を繰り返されたら、今度こそ命はない。しかし、わかっていながらもレーヴァは黒騎士と対峙していた。引くわけにはいかなかった。

しばしの間、黒騎士はレーヴァと向き合っていたが、突然踵を返して左手を払った。するとその空間に歪みが発生し、彼はその中へと足を進める。そして一瞬の内に姿を消してしまったのだった。再び静寂。辺りを埋め尽くしていた魔物達もいつも間にか忽然と消え去っていた。レーヴァがヘクターを見ると、彼は気を失っており、その上に重なるようにして彼の妻が伏している。

レーヴァの胸にヘクターの悲しみがなだれ込んでくる。またも大切な者を護れなかったという自負の念がヘクターの心を蝕み、同様にレーヴァの心をも締め付ける。

だが次にレーヴァが目にした光景によって、その苦しみは不安へと変貌を遂げる事となる。

黒騎士の槍によって穿たれたソフィアの傷がみるみるうちに塞がり、代わりに黒い刻印が彼女の体中を覆っていったのだ。

「これは……『魔魔の刻印』か！」

レーヴァは誰にともなく呟く。やがてソフィアの傷は完全に塞がり、彼女はい奇異を吹き返した。

「ヘクターよ、お前の妻は死よりも過酷な苦しみを強いられる事になりそうだ」

そう言い残し、最後に上空へ大きな火球を飛ばした後、彼はレーヴァティンの中へと吸い込まれていった。

第二幕 禍根（後書き）

さてさて、そろそろ長ったらしい文章に慣れて頂ける頃でしょうか？
次回もよろしくお願いします。

第三幕 光明（前書き）

戦慄の一夜が明け、皇帝と謁見を交わすヘクターの前に現れた人物
とは……

第三幕 光明

第三幕 光明

ソフィアは気がついた時、辺りを埋め尽くす熱気と硝煙に思わず咳込んだ。自分の家が燃えて、瓦礫の山になってしまったと気付いたのはそれから少し経ってからだった。

一体何があったの？ 目が覚めたらヘクターがいなくて、表を見たら街の方から火の手が上がってて……そうよ、空が割れてそこから大きな鳥のような……魔物が現れたんだわ。

ようやく事態を理解し始め、彼女はゆっくりと身体を起こす。

私は……なんともない、無傷だわ。でもどうして？

あの時、目が覚めてからヘクターが心配で眠れなかった。昼間も少し態度がおかしかったし、ベッドに入るまでずっと棚上の剣を気にしていた。なにか落ち着かない、またどこかへ行ってしまうのかって、不安になった。

それから私も剣が気になって、なんとなく手に取った時、あれはただの剣じゃないと感じた。とても暖かい、懐かしいような感覚。そして私を守ってくれる。まるでヘクターから受けている愛情をそのまま形にしたような、そんな印象を受けた気がした。でもその後は大きな黒い炎が窓の外に見えて……訳が分からないまま私は気が付いたらここに居た。

そうだ、ヘクターは？

「ヘク……」

彼の名前を呼ぼうとした時、やや離れた位置でヘクターの声が聞こえた。誰かと話しているようだった。

「ではクルニールは無関係なのか？」

彼はあの折れた剣を構えていて、その周りには先程ソフィアが目

にした大きな鳥のような、だが決して鳥ではなさそうな大きな魔物が彼を取り囲むように飛び回り、更に地上ではクルニールの兵士達がないやらおぼつかない足取りでヘクターに迫っていた。そして、彼の傍らには……

「あれは、魔物？」

驚いた事に彼の会話の相手は空を飛び回る巨大な魔物に似た、赤い翼を持つ巨大な鳥のようだった。

「あの魔物達を仕向けたのは王国の手の者と見て間違いないだろう」
どうやら巨大な赤い鳥は他のモンスターとは違い、ヘクターに敵意を持つてはいないようだった。むしろ彼に協力し、護ろうとしてくれている。ソフィアはそんな風に考えながらヘクターを見守っていた。

やがて封を切ったように空の一部がゆがみ始め、空間が分かれた。そこから現れた黒い鎧の騎士がヘクターへと向かって歩みを進める。

この時、ソフィアは言い知れぬ不安な気持ちに駆られた。「あの騎士は危険だ」彼女の五感が悲鳴を上げ、離れた所に居るのにも関わらず、黒い騎士からの強力な重圧を感じずにはいられなかった。
そしてヘクターとその騎士は戦いを始めた。先手を打ったのは赤い魔物だったが、黒い騎士はひるみもせずにヘクターたちを追い詰めていった。

「ヘクター……」

ソフィアはまだ力の入らない身体に鞭打ち、大木によしかかりながら立ち上がる。そうしている間にも騎士の放つ漆黒の炎がヘクター達に襲いかかる。彼らは既に万事休すといった状態だった。地面に倒れて身動きの取れないヘクターを騎士がいたぶり、とどめを刺そうと大きな槍をふりあげる。

「そんなこと、させないわ！」

その瞬間の彼女に迷いはなかった。大切な人を守りたい、唯一の愛する人を助けたい。その一心で彼女は走り出していた。

「ソフィア！」

大声を張り上げてヘクターは目を覚ました。

「夢か……」

彼が見た夢は妻が自分の代わりに命を落とす。それを何も出来ずにただ眺めているだけの自分。相手に抗う事も出来ず、阻止する事も出来ない自分。妻は自分の腕の中で息絶えていく。そんな内容だった。しかし、それは夢の中だけの出来事ではなかった。意識がはつきりしてくると昨夜の一件の記憶が明らかになっていき、身体の痛みは無数の傷跡がある事を物語る。

「夢じゃ……ないんだな」

ヘクターはしばしの間黙り込んだあと、

「レーヴァ、いるのか？」

身体を動かさず、天井を見つめたままで静かに問いかける。返事はすぐに返ってきた。

「ああ、目が覚めたのか」

室内はベッドが二つ置かれ、豪華な装飾の施された照明が壁に連なっており、中央には大きなシャンデリアが垂らされている。

「ここは客間か。レーヴァ、街はどうなったんだ？ あの騎士は？」

「あの騎士は我々を追い詰めた後、突然手下共を引き連れて立ち去って行った。何故かは分からないが、ずいぶんと諦めの良い引き際だったな」

「そうか……」

きつと何かしらの理由があるのだろう。しかし、ヘクターは考える気にはなれなかった。

「お前の妻だが……」

「やめろ」

ぴしゃりと言い放ち、ヘクターは目を閉じる。彼の心中を察した

レーヴァが、

「勘違いするな」

となだめる。

「お前の妻は死んではない、傷もすでに癒え、この城のどこかで眠っているだろう」

ヘクターは驚いて目を見開き、表情にはみるみる笑みがこぼれ始める。

「本当か？ 本当にソフィアは生きているのか？ 無事なんだな？」

「本当だ。だが…」

レーヴァが何か言いかけると同時に扉がノックされ、二人の会話は遮られた。

「失礼します」

そう言つて皇帝の側近である近衛兵が部屋の中へと入ってきた。

「ヘクター様、陛下がお呼びです」

「動けますか？」と付け加えて近衛兵はヘクターに着替えを渡す。

「ああ、大丈夫だ。五分後に行くと伝えてくれ」

「はい」

はきはきとした口調で答えた後、部屋を出ようとした近衛兵は思ひ出したように「あつ」と声を上げて振り返った。

「ヴァングリフ將軍がお戻りになりました。陛下とご一緒にお待ちです」

「將軍が？……そうか、わかった」

「では」

そうして近衛兵はドアの向こうへと去って行った。

「ヘクターよ、その將軍とは何者なのだ？」

近衛兵が部屋から出て行くのを待ってからレーヴァが尋ねる。ヘクターは手渡された衣服の袖を通してながら答える。

「俺の…いや、俺とダリルの師みたいな人だ。俺達に剣を教えてくれて騎士団では幾度となく命を救われた。そして、俺とソフィアを巡り合わせてくれた」

着替えを終えたヘクターはレーヴァテインを持って部屋を出る時、
「俺なんかより將軍の方が、ずっと神剣にふさわしいんだろっな」
自分自身に言い聞かせるように言った。

長い廊下を抜ける最中、ヘクターは思いの他身体の痛みが軽くな
っているような気がした。

「レーヴァ、これも竜人の力なのか？」

視線を手に握ったレーヴァテインへと向けてヘクターは問う。

「そうだ。だが竜人の治癒能力を持ってもこの程度しか回復し
ないとは、あの騎士の力、恐ろしいな」

ヘクターは再び視線を落とし、「ああ」と一言だけ答えて歩みを
進めた。

やがて突き当たりに大きな扉があり、それを越えると謁見の間へ
とたどり着いた。そこは床中に大理石が敷き詰められ、中央には赤
く良質な素材の絨毯が轆かれている。絨毯の脇には兵士達が等間隔
に整列し、その先の玉座には白髪を後ろへ流し、繊細な造りの王冠
を頭上に誇る初老の男性が座っている。そして横には鋼鉄の鎧に身
を包み、まるで獅子のように逆立った金髪を蓄えた、年の頃は四十
をゆうに越えているだろう、しかし年齢に全く似つかわしくない体
格の良い男が腕を組んでヘクターを見据えている。腰にはその体格
にぴったりの分厚く巨大な青龍刀を備えている。ヘクターは二人の
前に膝まづき、レーヴァテインを傍らに置く。

「遅くなりました。陛下、將軍」

一礼した後、二人に視線を送る。

「うむ、怪我はもう良いのか？」

陛下と呼ばれた初老の男性がヘクターに語りかける。

「はい、大事ありません」

「久しいな、ヘクター」

今度は腕を組んでいる男がヘクターに声をかけた。

「お久しぶりです。將軍」

ヘクターが答えたのを聞いて、「この男が將軍か。なるほど、良い面構えをしている」とレーヴァは感じたままをヘクターに囁いた。「昨夜の件、報告を受けて心配したぞ。だが良く無事でいてくれた。流石は我が帝国騎士団の小隊長と言ったところだな」

皇帝の言葉に、ヘクターは「いえ」とだけ言って首を振る。

「敵が城から姿を消し、街にドラゴンのような魔物が現れた後、兵の一人が街のはずれに巨大な炎を見た。まもなく魔物達は街から忽然と姿を消し、何人かの兵士が炎の元へ向かうと、お主とその妻ソフィアが発見され、すぐさま保護された」

皇帝の説明により、レーヴァの放った炎のおかげで命を救われた事をヘクターは知る。

「ソフィアの、妻の容態は？」

ヘクターが声を荒げて陛下に問う。

「報告によれば命の心配はないようだ。ただ、肉体的に問題は無いにもかかわらず、一向に目を覚まさないとの事だ」

「目を…覚まさない？」

「うむ、何か精神的な問題だろうか、原因は全く掴めていないようだ」

更に皇帝は少し息をつき、眉間にしわを寄せて、

「直接の関係があるのかは分からないとの事だが、ソフィアの全身にうつすらと黒いあざのようなものが浮き上がっているとの報告もあった」

と重々しく告げた。

「あざ？ しかし昨日まではそのようなものは……」

そこまで言ってからヘクターはハツとした。そしてレーヴァティンに向かって、

「レーヴァ、何か知っているか？」

と少し焦って問いかける。彼のその様子を皇帝と將軍は目を丸くして見ている。

「ヘクター、なにを……」

皇帝は少し間の抜けた声を出す、ヘクターは見向きもせず傍らの折れた剣に向かってなおも語りかける。

「レーヴァ、答えてくれ」

それまで黙っていたヴァングリフも、

「おい、何を言ってるんだお前は」

とヘクターに歩み寄って彼の肩を掴んだ。

その時、折れた剣から炎が立ち昇り、レーヴァが姿を現した。突然の出来事に皇帝は固まる。兵士達もどよめき、口々に騒ぎ始めた。ヴァングリフは反射的に身構えてレーヴァとの間合いを取る。近衛兵が皇帝の周りを固め、騒いでいた兵士達もやがて落ち着きを取り戻し、槍を構えてレーヴァを取り囲むように隊列を組む。

「ヘクター、これは一体どういう事だ！」

ヴァングリフが青龍刀を構えて冷静な口調をヘクターに向ける。

「將軍、待って下さい。彼は……」

ヴァングリフの口ぶりに気押されたのか少々焦って弁解しようとするが、將軍も兵士達も全く聞く耳を持たないと言った様子で、じりじりとレーヴァとの距離を詰める。その表情は怒りを抱えているようだ。だがそれも当然だろう。彼らの街を焼き、多くの人々の命を奪っていった翼を持った魔物ワイバーン。その邪なるものによく似た姿のレーヴァを同一視してしまう事は、今の騎士団にとっては当たり前の反応だと言えよう。

「みんなも待ってくれ、彼は違うんだ！」

ヘクターは立ち上がり兵士達に向かって叫ぶが、誰も足を止めるものはいない。謁見の間はまさに一触即発といった状態だ。

「グウウウウオオオオオオ！」

その緊迫した空気を弾き飛ばしたのはレーヴァの咆哮だった。空間そのものを揺るがすレーヴァの叫びに兵士達はパニックを起こして騒然となる。ヴァングリフでさえ簡単に動く事は出来なかった。そして今まで黙り込んでいたレーヴァが部屋中の者に向かって口を開く。

「騒ぐな、人間共」

時を止めたように皆ピタリと固まる。

「私を昨夜の魔物と同一視するのは構わん。貴様らにとっては私もただの魔物にしか見えまい。しかし、私は奴等ほど甘くはないぞ。簡単に貴様らの刃が届くとは思わない事だ」

兵士達や皇帝は何も言う事が出来ずにただレーヴァの言葉に耳を傾ける。しかしヴァングリフだけは未だギラリとした眼光を放ち、今にもレーヴァに飛び掛りそうな勢いだ。

「説明させてください。陛下、將軍」

ヘクターは慌ててヴァングリフの前に立ち、レーヴァとの衝突を防ごうと彼をなだめる。

「彼の名はレーヴァ、炎の神剣レーヴァティンに宿るドラゴンです。そして私は先の任務の折、命を落としかけたところをレーヴァとの『魂の契約』によって救われ、敵を退けました。彼が言うには私と彼は一心同体。同じ目的を持つ運命共同体のようです」

最初は疑惑の眼差しを向けていたが、まんざら嘘ではないと思っただろう、將軍は刀を納め、皇帝も兵士達に剣を引くように命ずる。ヘクターはレーヴァとの出会いを、そして昨夜の出来事を知りうる限り皆に語り出す。

「なるほど、にわかには信じがたい話だがヘクターの話が事実なら、たった一人の生還者となったことも、昨夜の事も説明がつくな。ヴァングリフよ、お主はどう思う？」

ヴァングリフはしばし黙り込んでから、

「私もまだ確信は持てませんが、今目の前にいるドラゴンを見てしまったからには信じる他無いでしょう。それに神剣は竜騎士ラディアスの死後、誰にも修理する事が叶わないまま、ルフォートの祠に封印されたといえます。見た目にはただのガラクタですが本物だとすれば相応だとも思われます」

兵士達は再びざわめき出すが、レーヴァへの疑いは晴れているようだ。

「ただ、一つだけ分からない事があります」

ヴァングリフは静かに言う。

「なんだ？ 申してみよ」

皇帝はヴァングリフを促し、ヘクターはゴクリと唾を飲み込んでヴァングリフを見るが、レーヴァは黙ったままだ。

「ヘクターが竜の力を手に入れてドラゴンと共に戦ったのなら、そう簡単に魔物共に遅れを取る事など無いハズです。しかし発見された時にはヘクターはかなりの傷を負い、更に彼の妻ソフィアも不可解な状態で保護されている」

そう言ってヘクターに振り返ったヴァングリフの目を、ヘクターは直視する事が出来なかった。

「ヘクター、一体誰がお前達をあそこまで追い詰めたのだ。ソフィアを人質に取られたのか？ そうでなくてはただの魔物などに遅れを取るお前では無いだろう？」

ヘクターは多少口ごもり、やがて言いづらそうに答えた。

「昨夜、私達に重症を負わせてソフィアをも手にかけたのは……クルニールの騎士です。奴は魔物を率いて帝国に攻め込んできました。目的は恐らく私の持つレーヴァテインだと思われます」

「なんと！ クルニールだと？」

皇帝が驚きの声を上げる。兵士達もそれに便乗して動揺をあらわにする。

「まさかとは思っていたが、やはりクルニールか……」

ヴァングリフは舌打ちをして溜息を漏らす。

「ヘクター、お前を退けた騎士というのはそのワイバーンとやらよりも更に強大な力を持っていたというのか？」

皇帝は震える声で尋ねる。

「……はい、私とレーヴァが共に立ち向かってもらって歯が立ちませんでした。その者は黒い鎧で身を固め、魔力を有した巨大な槍を

いとも軽々と使いこなしていました」

ヘクターは言い終えた後、ぐつと奥歯を噛み締めた。やりきれない想い。それは隣で黙ったままのレーヴァも恐らく同じだろう。

「黒き鎧の騎士か……」

皇帝の一言の後、謁見の間はしばしの沈黙に包まれた。

やがて何かを考え込んでいたヴァングリフが口を開く。

「聞いた事がある。数年前に王国の騎兵団に入隊した男の話だ」
思い出しながら語りだすヴァングリフに皆が耳を傾ける。

「男は全身を漆黒の鎧で纏っており、手には身の丈をゆうに越える巨槍を持ち、更には不可思議な術をも使うという。瞬く間に騎士長の座につき、軍事に至っては王と同等の権力を手にしたと聞く。ただの噂に過ぎないと思っていたが……」

皆、固唾をのんでヴァングリフの話に聞き入っている。

「おそらく、その男と見て間違いないでしょう。奴の持つ槍によってソフィアは……」

ヘクターは自分の身代わりになり、床に伏したままの妻を想う。

その様子を見たからか、ずっとだんまりを決め込んでいたレーヴァがこの時、やっと口を開いた。

「ヘクターよ、お前の妻を蝕んでいるのは『夢魔の刻印だ』」

突然のレーヴァの言葉にヘクターは首を傾げ、次の言葉を持った。

現在帝国において、伝説の戦いについての信憑性はもはや無いに等しい。ヘクターが持ち帰るまでは神剣の存在でさえ信じる者は少なかった。それどころか今では神官や司祭達ですら『竜騎士ラディアスと邪神との戦い』をただのおとぎ話としか認識していない。その為、今はレーヴァの言葉以上に真実に近いものはないだろう。

そもそも、伝説とは人から人へと語り継がれるもの。ヘクターや兵士達といったこの世界に生きる人々の認識している戦いの伝説と遙か昔の人々が目の当たりにした戦いとの間には、大きなへたたりがあるだろう。

「レーヴァ、詳しく聞かせてくれないか」

ヘクターだけでなく皇帝やヴァングリフにしても、その意見には相違なかった。

「覚えているだろう、あの黒い騎士にはいくつか不可解な点があった。一つは私の炎を受けても傷一つ負わなかった鎧。あれは恐らく『魔装具 ヨルムンガンド』だろう。そして手にしていた魔力を持つ巨槍は『魔槍 ミストルティン』。共に人が造りだせる物でも扱える代物でもない」

「ヨルムンガンドに、ミストルティン……」

ヘクターは黒騎士との戦いを思い出す。決して届くはずのない間合いから向かってきた巨槍、ワイバーンを一撃で黙らせたレーヴァの炎が全く通用しなかった鎧、この二つの出来事だけでも人間がなせる業ではない事はヘクターにも明白だった。

「二つ目は、その二つを使いこなして私とヘクターを仕留めた魔力だ。自然界においてドラゴンを越える魔力を持った人間など存在するハズがない。だが奴は私を越える魔力を持ち、圧倒的な力で我らを叩き伏せた」

そう、そうだ。俺とレーヴァの攻撃を受け止め、弾き返して更に追い討ちをかけたのは鎧の力でも槍の力でもない。奴が放った魔術のような、レーヴァの技とよく似たものだった。あの時、レーヴァは言っていた。ドラゴンと契約して竜人となってもあの力が使えるようになるわけではない。しかしあの騎士が放ったのは紛れもなく魔力を使った術だった。

ヘクターは黒い騎士の正体よりも、相手の持つ魔力の謎になんとも言い知れない不安な気持ちを抱いた。

「三つ目は奴の目的だ。当初は我々の命を奪う事だと思ったのだが、奴は突然去って行った。それが叶う状況にも関わらずだ」

「それが分からない今、またいつクルニールが攻め込んでくるかも予測がつかないな」

ヴァングリフが腰に手を当てて煮え切らない様子を見せる。

「ドラゴンよ……レーヴァといったか、先程の『夢魔の刻印』というのは一体なんだ？」

皇帝が問いかけた。ヘクターもそれに続いて、

「そうだ、一体ソフィアに何が起きているんだ？」

とレーヴァに尋ねる。

「お前の妻の身体にはうつすらとあざの様なものが浮かび上がったと聞いたな？　だがそれはただのあざではない。ミストルティンの魔力によりもたらされた一種の呪いとも言ったところか」

「呪いだと？　じゃあソフィアがいずれ命を落とす事になるとも言うのか？」

ヘクターがレーヴァに迫り、声を荒げる。

「いや、死ぬ事はない。『夢魔の刻印』とは体のあざがやがて鮮明に浮き上がり、その人間の身体を依り代として夢魔を召喚する為のものだ。刻印を刻まれたものは命を身体へと残し、精神のみを夢魔によって奪われてしまう。見た目には眠っているただだが二度と目覚める事は出来ないであろう」

ヘクターは言葉を失った。先程ソフィアの無事を聞いた時感じた安堵感はどこかへ行ってしまう、再び自責の念に囚われる。

俺の……俺のせいだ……

すでに放心状態にあり、心ここにあらずのヘクターをよそにヴァングリフがレーヴァに質問をした。

「どうすればその刻印とやはらは消えるんだ？　何か方法があるだろう？」

ヘクターはうつろな目でレーヴァを見る。レーヴァは少しだけ考え込んだ後ヘクターを一度見据えてから、

「詳しくはわからないが、可能性があるとすればミストルティンの破壊だろう」

力強く言う。

「つまり、黒い騎士を倒すしかないという事か」

ヴァングリフは複雑な表情で呟く。

「勝てる見込みはあるのか？」

皇帝は確信をつく質問を投げかける。それは同時にヘクターが知りたかった事でもあった。

しかし、レーヴァは首を横に振り、

「今の時点では勝てる可能性は皆無に等しいだろうな」

無常にもヘクターに現実を突きつける返答だった。それはヘクターだけでなく、皇帝やヴァングリフ、兵士達も落胆の色は隠せなかった。

「ちっ、お手上げか。ドラゴンでも勝てない相手に俺達人間が逆立ちしたってかなうわけがない」

ヴァングリフが叱咤する。皇帝も口をつむぎ、ヘクターに至ってはただ黙ってその場に立ち尽くしてしまっていた。

その様子をしばし見守っていたレーヴァは、やがて口元に笑みを浮かべ、

「人間達よ、一つ忘れてはいけない事がある」

と言つて翼を一度羽ばたかせる。そして続けざまに一言。

「お前達にはヘクターと私、竜の力がついてる」

その一言に、皆が希望のまなざしをレーヴァに向ける。

「現時点では確かに勝ち目はない。それは変わらない。しかし、神剣の力を取り戻せば私も封じられた力を発揮する事が出来るだろう。さすればヘクターも奴に遅れを取る事はない。奴を打ち負かすなど造作もないハズだ」

「神剣の力を取り戻す？ その折れた剣を修理するということか？」

皇帝が半信半疑といった様子で尋ねる。ヘクターは錆びついて輝きを失ったレーヴァティンを見つめ、レーヴァの言葉の意味を考える。

封印された力……レーヴァにはまだ余力があるということか？

「それも必要だ。だがそれだけでは神剣は力を発揮しない。異なる五つの『宝玉』を集めるのだ。そうすれば神剣の真の力は引き出さ

れる。現在のレーヴァティンはただの器だ。中身のない器から生じる力は微々たるものでしかない」

「器……つまり今の神剣は中身が空の状態で、宝玉を集める事で器に力が注がれ、神剣に宿っているレーヴァの力も増していく。更には契約をかわしたヘクターの力もレーヴァのそれに伴い、強力なものとなっていく……そういう事か」

ヴァングリフは無精ひげをさすりながら要点を確認し始める。レーヴァの口から語られた内容に関心を持ったようだ。

「しかし、かつての英雄ラディアスでさえ全ての宝玉を集める事は叶わなかったと聞く。ドラゴンよ、あなたはそれをご存知なのか？」

『宝玉』の在り処に心当たりが？」

皇帝はレーヴァに尋ねる。それに続きヴァングリフも、

「そうだ、伝説によると戦いが終わった後、神剣は人間の手に、そして宝玉は四体の古代竜達にゆだねられたとされている。今でも四体のドラゴンが守っているのか？」

レーヴァに向かって質問を繰り返す。レーヴァは二人の疑問を一手に受けるも、躊躇することなく余裕を感じさせる声で答える。

「ドラゴンは長命だ。恐らくは今でも四つの宝玉を守り続けている古代竜が各地に存在しているだろう、居場所については心配ない。レーヴァティンと宝玉は共に互い呼び合う。宝玉への道は剣が示してくれるだろう」

兵士達から安堵の笑みがこぼれる。皇帝も納得したのか背もたれによしかかり、ふう、と息をついた。だがヴァングリフは真剣な表情を崩す事無くヘクターに問いかける。

「ヘクター、クルニールの脅威が収まらない今、騎士団が帝国を離れる訳にはいかない。宝玉を捜すのはお前の役目だ。出来るな？」

ヴァングリフの言い方には何か意味を含んでいるようにレーヴァは感じた。そして案の定ヘクターの口から出た返答は皆を落胆させるものとなった。

「將軍、陛下、申し訳ありません。レーヴァティンを修復し、宝玉

を集め、黒い騎士に打ち勝つことは、私には出来かねます……」

兵達が出鼻をくじかれたように騒然となる。ヴァングリフは何も言わず軽く目を閉じて二、三回首を横に振る。

「ヘクターよ、理由を聞かせてはくれないか？ お前程の男が一体どうしたと言っただ？」

皇帝は全く解せない様子でヘクターに問いかける。ヘクターはうつむいたまま顔を上げずに答える。

「私は……先の任務の際に部下を全て失い、親友が目の前で命を落とすのをただ見ている事しか出来ませんでした。そればかりか昨夜の戦いでは黒い騎士に抗うことも出来ず、私をかばった妻は奴の手にかかり……」

レーヴァもヴァングリフもヘクターの心情には感じていたのだろう。皇帝や兵士達でさえヘクターを批判できる者は誰一人いなかった。

「あの騎士への恐れもあるのかもしれませんが。しかし、次に奴と対峙した時、たとえ神剣の力を取り戻していたとしても奴に勝てる自信が私にはないのです。私が戦うことで誰かが命を落としてしまう事にはもう……耐えられません……」

ヘクターは拳を握りしめ、熱くなった目頭から涙がこぼれないように必死にこらえた。

「ヘクター……」

皇帝はそれ以上は何も言えずに口をつむいだ。

「申し訳ありません。私はこの神剣にはふさわしくない男です……失礼します」

ヘクターはレーヴァティンをその場に残し、立ち上がってから一礼して謁見の間を後にした。ヘクターが部屋を出た後、残されたレーヴァにヴァングリフが問いかける。

「レーヴァよ、お前の目から見てもあいつはふさわしくないか？」

レーヴァは身体を炎へと変え、神剣の中へと戻る最中、

「それを決めるのは私ではない。ふさわしいかそうでないかは……」

ヘクター次第だ」

そう言つて姿を消した。

「ふっ、いい事言つじゃないか」

レーヴァが姿を消した後、剣を拾い上げたヴァングリフが口元に笑みを浮かべる。

謁見の間を後にしたヘクターは城内の治療院へと向かい、その中の一室で眠るソフィアの元へと向かった。螺旋階段を下り、長い廊下を抜けると無機質な扉が向かい合わせに三つずつ並んでいる。ちょうどすれ違った医師にヘクターが尋ねる。

「すまない、妻の、ソフィアの病室は？」

「こちらですよ」

医師は左側の一番奥の扉を開く。そこは窓が一つだけしかなく、昼間でも薄暗い陰湿な部屋だった。ベッドの上には静かに眠るソフィアの姿があった。

「ソフィア……」

医師が去つて行つた後、ヘクターはベッドの脇にある椅子に腰掛けてソフィアの手を握る。

「許してくれ……ダリルばかりでなく君までもこんな目に合わせてしまった。俺が不甲斐無いばかりに……」

ソフィアは何も答えないでただ静かに眠り続けている。ヘクターは彼女の指から手首にかけて黒いあざが浮き出ているのを発見した。「これが夢魔の刻印か、やがて全身に広がりソフィアはもう二度と……」

そこまで言つてヘクターは顔を伏せる。

許してくれ、俺はあの騎士には勝てない。どんなにあがいてもあいつの強大な力の前では俺なんて虫ケラ同然なんだ。たとえレーヴァテインが力を取り戻しても……

「まだ、迷っているの？」

一瞬、ソフィアの声が聞こえた気がしてヘクターは顔を上げるが、

彼女は先程と変わらずに眠り続けている。

「まだ迷っているの……か」

ヘクターに聞こえたのは心の声だった。遠い記憶の中、まだヘクターがヴァングリフの元で副隊長として大隊にいた頃の事。経験と実力から考慮され、またヴァングリフからの勧めもあり、ヘクターは約二年前に第二小隊の隊長に抜擢された。

しかしこの時、ヘクターは悩んでいた。まだ將軍の足元にも及ばない自分が隊長となり、一つの部隊を率いる事。部下を統率し、任務を遂行する事など出来るのだろうか？

ヘクターは答えが出せずに悩み続けた。

その時、すでに深い関係にあったソフィアがヘクターに言った言葉。

「ヘクター、まだ悩んでいるの？ あなたなら大丈夫よ、きつと」

その一言は不思議とヘクターの心の闇を取り除き、迷いを断ち切ってくれた。

「君のおかげで俺は前に進む事が出来たんだな」

ヘクターはその事を思い出しながら、彼女の大切さや重要さを改めて実感した。

「君はもう一度俺にその言葉を言ってくれるのか？ 今の俺にはもう……何もないんだぞ？」

目を覚まさないソフィアに語りかける。答えが返ってこないことは分かっているが、ヘクターは声をかけずにはいられなかった。そうでもしていないと自分の存在が消えてしまいそうに思え、胸が激しく締め付けられる。

耳鳴りがするほどの静寂に包まれた部屋の中で、ヘクターはただソフィアを見つめていた。

どれくらい時間が経っただろうか、不意にガチャッと音を立てて扉が開き、ヴァングリフが現れてヘクターに声をかけた。

「ヘクター、やはりここにいたか」

「將軍……」

突然声をかけられてヘクターは飛び上がった。

「ついて来い」

ヴァングリフは言い残して扉の向こうに姿を消す。いつもと違う鬼気迫る口調の彼をヘクターは慌てて追いかけた。

廊下へ出ると神剣を片手に持ったヴァングリフが「行くぞ」と言っ
て歩き出し、ヘクターもそれに習い歩き出した。

二人が行きついた先は騎士団の訓練施設だった。ここは普段多くの兵士達で溢れ、教官の罵声飛び交う、いわば城内の戦場といったところだ。城の中庭に位置しており、十分な広さを兼ね備え、壁には剣や槍、斧、短刀といった武器がいくつも連なっている。

ヴァングリフは床に神剣を置き、ヘクターに振り返る。

「ヘクター、剣を取れ」

「え？」

状況を把握できていないヘクターに向かってヴァングリフは更に続ける。

「久々に稽古をつけてやる。さあ剣を取れ」

そう言っ
てヴァングリフは巨大な青龍刀を抜き、鞘を脇へと放る。ヘクターは言われるがままに何十本と連なった剣の一つを取り、ヴァングリフに向き直って構える。

「何だそのツラは？ 微塵も気迫を感じないぞ。貴様のねじ曲がった根性、俺が叩き直してやる。遠慮せずにかかって来い」

ヘクターは何も言い返せずにたじろいでいる。その様子に見かねたのだろう。

「来ないのか、ならば俺が仕掛けるしかないな」

そう言っ
て地を蹴り、ヴァングリフが鋭い袈裟斬りでヘクターを牽制する。

ヴァングリフの青龍刀から見れば、今ヘクターが手にしている長剣は細く弱々しいといえる。ヴァングリフの斬撃を受け止め続けるのはとても困難を極めた。

「くっ！」

何度かヴァングリフの攻撃を受け流し、弾き、避けていたヘクターだったが、やがて疲れを見せたのか、一瞬の隙をついたヴァングリフの切り上げによってキンッ！と高い音を立てて剣を弾き飛ばされてしまう。宙を舞った剣はやがて鋭い音と共に床へと突き刺さる。青龍刀を肩に乗せてヘクターを見下ろしながらヴァングリフは、

「なんてザマだ。情けないなヘクター」

皮肉めいた言葉をヘクターに向ける。ヘクターは片ひざをついたままヴァングリフから目をそらしてうつむいた。

「貴様がそんなでは死んでいった仲間達に顔向けが出来んな」

「くっ……」

ヘクターはこぶしを握り締める。

「今の貴様にはこの折れた剣の方がお似合いだ」

ヴァングリフは床に置かれたレーヴァティンをヘクターの方に蹴りつける。

「拾え」

更に続けて言われたヘクターはそれを見つめながらも手に取ろうとはしない。自分には持つ資格はないと言いたげに剣を取らないヘクターに向かって、ヴァングリフは容赦なく青龍刀を振り下ろした。

ヘクターはよきれずにとっさにレーヴァティンを掴んで打ち下ろされた刃をなんとか受け止める。

「將軍、もうやめてください！」

「何をだ？ 貴様はこの期に及んで何に怯えている！」

ヴァングリフは叫びながら次々と渾身の一撃を叩きこんでくる。

その威力はレーヴァティンを掴むヘクターの手が次第に痺れを覚え、感覚を失う程強烈なものだった。

「私は……もう何も失いたくはないのです」

「護れないからもう戦わないと言うのか！ それではダリルも浮かばれんな」

「將軍！」

親友の名を出され、気の緩んだヘクターの手からレーヴァティンを弾き、彼の眼前に刃を突きつけてヴァングリフは冷ややかに告げる。

「いつその場で死ぬか？ その方がダリルも喜ぶかもしれない」

ヘクターは刃を向けられた恐怖よりも己自身の力の無さを悔やみ、將軍に何を言われても反論できなかった。

將軍に殺されるならそれもいいかもしれない。どうせ生きていたって……

ヘクターの心中とは裏腹に、ヴァングリフは刀を納める。ヘクターが「なぜ」と言う前に彼は背を向けた。

「ふん、お前を殺したらソフィアが悲しむからな。俺はあいつに恨まれたくはない」

ヴァングリフは頭をボリボリとかきむしる。

「將軍、私には無理です」

ヘクターは心のままを告げる。

「私にはソフィアを目覚めさせることは……あの騎士に勝つことなんて叶わない。いつそのことソフィアの側で……」

言い終える前にヴァングリフが振り返り、ヘクターの胸ぐらを掴んで彼を持ち上げる。

「うつ、ぐつ」

抵抗できないほどの怪力で首が絞まり、息が出来ないヘクターはただもがくばかりであった。そして次の瞬間、ヴァングリフの大きな拳がヘクターの顔面にめり込む。

ヘクターは二、三メートル程床の上を転がった。口の中が鉄の味でいっぱいになり、思わずその場に吐き出す。真っ赤な血だまりが広がる。

「だから貴様は馬鹿なのだ！」

すかさずヴァングリフの罵声が飛ぶ。

「ダリルの死も、ソフィアが呪いを受けて眠りについたのも、全ては何者かによってもたらされた災いだ。それを己の罪に転化して自

分を攻めるのはもうやめろ！」

ヴァングリフの言葉がヘクターの胸に強く響く。

「良く考える、ソフィアがお前を守ったのはそんな事をさせるためではないだろう？」

叫び続けるヴァングリフ自身もまた、帝国の危機に不在だったことを悔やんでいるのだった。ヘクターはこの時始めて彼の気持ちを少しだけ汲み取る事が出来た気がした。

「お前が前に進まない限り、何一つ解決などしない。思い出すんだ。お前がどうして力を求め、騎士団に入ったのか。その力を誰の為に、何の為に使いたかったのか」

ヘクターの目からは自然と涙が溢れていた。

そうだ。ソフィアやダルルだけではない。ここにも自分を想ってくれる人がいた。そして、守らなければならない人はまだたくさんいるんだ。

ヘクターは瞳を閉じる。涙を拭うのも忘れていた。

「それでもまだ前に進めない言うのならその時は、俺がまた殴ってやる」

そう言い残してヴァングリフは去っていった。ヘクターはその背中を見つめながら、

「ありがとう・・・ございます」

小さく震える声で言った。

二人のやり取りをじっと見守っていたレーヴァは、感情の波が通り過ぎ、やっと落ち着いたのであるうヘクターの前に姿を現した。

「その頬、痛むのか？」

ヘクターは何も言わずに首を振る。そしてレーヴァをまっすぐに見据えたその瞳には、一片の迷いも感じさせなかった。

「なあレーヴァ、お前は強くなれるのか？ あの手騎士に勝てる位に強くなれるのか？」

それは質問と言うよりも確認しているようにレーヴァには感じら

れた。レーヴァは「ふっ」と笑みを浮かべて答える。

「当然だ。お前は誰と契約したと思っている？ 力を取り戻した私と共にいれば、もはや誰にも遅れは取らないだろう。無論、あの騎士にもな」

「そうか……」

ヘクターもまた、口元に笑みを浮かべて立ち上がる。

「行こう、俺達で力を取り戻すんだ」

ヘクターは青く澄み渡った空を見上げた後、レーヴァに向き直る。

「ふふっ、そう来なくてはな。まずは神剣の修復が必要だ。『剣聖オルザ』を探すのだ」

「剣聖……オルザ？」

「かつての英雄ラディアスと共に神に戦いを挑んだ人物。剣の腕はラディアスをもしのいだと言われている。神剣を修復できるとすればそやつを除いて他にはいないだろうな」

しかし、ヘクターは釈然としない表情をレーヴァに向ける。

「でもそんな昔の人間だったらとうに寿命を迎えているだろう？」

「剣聖オルザは戦いの後、ある者との契約により不死人となった。

そして再び神剣を扱う人物を待ち続けているという。今もこの世界に存在しているはずだ」

「不死人……か」

「レーヴァティンが生み出されたとされているクジエート山脈という所がある。そこに何かしらの手がかりはあるだろう」

ヘクターはこの時、自分はいつもレーヴァに言われるがままにしか行動していない事に気付く。しかし、彼を頼らずに誰を頼れるだろう。今はこのドラゴンがもっとも力強い味方だと言う事をヘクターは理解していた。

「頼むぞ、レーヴァ」

ヘクターはレーヴァのたくましい身体にそつと手を触れる。

「足を引っ張るなよ、ヘクター」

二人はもう一度、互いに笑みを浮かべた。

第三幕 光明（後書き）

次話から、ヘクターがフォルティアの各地を旅してまわります。様々な出会いと別れが彼を更なる試練へと誘い込んでいく。その中で、彼は何を思い、何を感じるのでしょうか……

第四幕 剣聖

第四幕 剣聖

明くる日、被害を受けた人々を弔う埋葬式が行われた。参列者の中にはヘクターの姿もあった。神官による花向けの言葉の後、遺族達は涙ながらに死んでいった者達との最後の別れを惜しんだ。

ヘクターは一人一人に花を贈り、最後にダリルの遺体を見送る。

「覚えてるか？ ケイディの港町で買ったバungalowだ。お前はこれ見るたびに譲って欲しいって俺にせがんだよな。今更だけど、受け取ってくれ」

ヘクターはもう決して返事をしない親友の腕に銀製のバungalowをはめる。そして彼の首に輝いているロザリオを外し、

「何にもなくなっちまうのも寂しいからな」

そう言って自身の首に下げ、強く握り締めた。

「ダリル、俺決めたよ。もう立ち止まらない。前に進むんだ」

ヘクターの瞳からは以前の迷いは消えていた。やがてダリルの棺は運ばれていき、それを見送った後、

「見守っていてくれ」

呟いて踵を返したヘクターにレーヴァが語りかける。

「なぜ、人間は死をそんなに恐れるのだ？」

「レーヴァは死ぬのは怖くないのか？」

ヘクターが聞き返すと、レーヴァは神剣の中から静かに答える。

「怖いと感じた事は無いな。ドラゴンも死を恐れない。長き寿命を終えたドラゴンの魂は転生し、再び目覚めるまで長い眠りにつく。そして時が来れば再びドラゴンとして甦る。ゆえに我々は死を恐れる」という概念は持ち合わせていないのだ」

ヘクターはなるほど、とうなずく。

「じゃあ愛する者や大切な者を失う事の辛さも感じないのか？」

「ドラゴンは誰かを愛する事など無い」

「そう、だよな」

ヘクターは「ははっ」と吹き出した。しかしそのすぐ後のレーヴァの言葉にヘクターは思わず立ち止まった。

「だが、大切な者と離れ離れになる気持ちは……理解できる」

「レーヴァにも大切な者が？」

しばしの間レーヴァは押し黙ったが、

「私は大切な相手がいるわけではない。失ったという記憶も持っていない。だが……何故かは分らんがその気持ちは分かる。そう、痛い程にな」

自分でもうまく表現できないといった様子で言う。ヘクターはこの時、レーヴァもまた重く辛い過去を背負っているのだろうかと感じ、再び歩みを進めた。

その後ヘクターは謁見の間に向かい、皇帝とヴァングリフに宝玉を探す旅に出る事を伝えた。皇帝もヴァングリフも快く賛同し、どこに向かうのかとヘクターに尋ねた。

「まずはレーヴァテインの修理の為に『剣聖オルザ』を捜しにクジエート山脈に向かいます」

「『剣聖オルザ』か、三百年前の人間が不死人となって存在しているとは……だがもうこれしきの事では驚く事は出来ないな」

ヴァングリフは苦笑いを浮かべる。

「私も同感です。しかし今はレーヴァの言葉を信じて行動するのみです」

「必ず戻って来るのだぞ、帝国にとってもお主の不在はかなりの痛みとなるのでな」

皇帝もヘクターの身を案じているようだ。

「それにクジエート山脈はタチの悪い山賊共の巣窟だ。くれぐれも用心しろよ」

「心得ています。しかし心配には及びません。必ず宝玉を手に入れ……」

その時、謁見の間の扉が開き一人の騎士が現れた。

「失礼します」

「おお、来たか、ザックよ」

ザックと呼ばれた騎士は入り口で一礼し、三人の元へと歩みを進める。茶色い髪を短く整え、ヘクターと同等の背丈をした身体に騎士団の鎧を纏ったザックは、鋭い眼光をヘクターに向けた後に彼の横に立ち止まった。

「ヘクターよ、ザックと第三小隊をお主に同行させようと思ってな、その為にザックを呼んだのだ」

「陛下、しかし……」

その言葉に驚いたヘクターを遮り、ザックが口を開いた。

「お言葉ですが陛下、その任務はお受けしかねます」

「何？ どういうことだ？」

皇帝は聞き返す。

「理由は簡単ですよ。部下を見殺しにして自分だけのうのうと逃げ帰って来るような臆病者と共に戦場に向かうなど私はごめんです。部下にも死に行けと言うようなものですしね」

「ザック、貴様……」

ふてぶてしい態度をとるザックに対し、ヴァングリフが怒りをあらわにする。皇帝も言葉を失いつて困り果てた表情を浮かべた。

「陛下、私もザックと同じ意見です」

ヘクターの言葉に一同があっけに取られる。

「ヘクター、しかしそれでは……」

皇帝はたじろぎ、ザックは何も言わずにヘクターを睨みつけている。

「私はレーヴァと二人で行きます。ザックの言う通りまた誰かを巻き込んでしまうかもしれない。私と一緒にでは彼にも彼の部下にも危険が及びます。それに、クルニールの脅威が去ったわけではありま

せん。いつ襲撃にあっても対応できるように今は戦力を温存しておくべきかと」

ヘクターの言葉に皇帝は「しかしな……」と考え込む。その様子を見たヴァングリフは笑みを浮かべてうなずき、

「陛下、ヘクターの言う通りです。それに宝玉に関しては何も有力な情報がないのも事実です。下手に動くよりも、ここはヘクターに任せましょう」

皇帝の背中を押す。それでも皇帝はなおも渋ったままにいる。どうやらヘクターを一人で行かせることに多少なりとも不安が残るようだ。そこに割り込むようにザックがヘクターに向かって、

「面白い、そこまで言うのなら一人でやり遂げる自信があるんだろ
うな、わかってているのか？ 貴様がしくじればそれは帝国にとって
も多大な被害をこうむる事になるんだぞ」

と威圧的な意見を述べてヘクターを睨みつける。しかしそんなザックに対して、ヘクターは極めて冷静に答えた。

「分かっているさ、ありがとうザック」

全く動じる事の無いヘクターの返答に「ちっ」と舌打ちをしてザックはそっぽを向く。

「うむ、そこまで言うのなら仕方ない。ヘクターに任せるとしよう。
ザック、すまんが第三小隊は引き続き情報の収集と周辺の警備に当
たってくれ」

「……はい」

ザックは納得のいかない様子で答えた。

「陛下、勝手を言ってしまい申し訳ありません」

ヘクターが頭を下げる。

「うむ、お主を信じておるぞ」

「ありがとうございます」

そうしてヘクターは部屋を後にする。

「ザック、わざわざ呼び立ててすまなかった。お主も下がって良いぞ」

「はい、失礼します」

一礼した後、ザックは振り返って歩き出す。ザックが部屋を出たのを確認した後に皇帝はヴァングリフに問いかけた。

「ヴァングリフよ、なぜザックはあれほどまでヘクターを敵視するのだ？」

ヴァングリフは頭をボリボリとかき、顔をしかめながら答える。

「二年前、小隊を編成する際に第二小隊の隊長にはザックの名が上がっていました。しかし私の勧めもあり、実力で勝るヘクターに急遽白羽の矢が立ったのです。きっとその事を根に持っているのでしょう。ザックは騎士としては優れた面を見せるのですが少々感情的な所が目立つ男です」

「うつむ……」

皇帝は腕を組んで溜息を漏らした。

部屋を出てから立ち止まり、二人の話を聞いていたザックは口元にギリッと音を立てて、

「ヘクターめ……」

と、小さく呟いた。

謁見の間を出たヘクターはその足でソフィアの眠る部屋へと向かった。部屋の扉をゆつくりと開くと、先日と変わらず静かに眠り続けるソフィアの姿があった。

「ソフィア、さっきダリルにさよならを言ってきたよ」

ヘクターは何も言わないソフィアの手を握る。

「あいつ、きつと見守ってくれるよな。俺の事も君の事も」

ヘクターは旅立つのをやめてソフィアの側に残ろうかと何度も思ったが、そのつど思いとどまり、そうする事はしなかった。

「側にいてやれなくてすまない。でも、俺は行かないと」

ソフィアの指先から二の腕の方まで広がっている黒いあざを見ながら、ヘクターは胸中を覆いつくす程の黒騎士への怒りをたぎらせる。

「必ず救い出すからな。待っていてくれ、ソフィア」
そうしてヘクターはソフィアの元を後にした。

夕刻、準備を整えて城を後にするヘクターに声をかけたのはヴァングリフだった。城門を抜ける直前の所で突然呼び止められ、ヘクターは危うく馬から振り落とされそうになった。

「將軍、どうしたんですかそんなに急いで」

「どうしたじゃないだろ、なにもこんな夕暮れに城を出なくてもいいだろう」

ヴァングリフは息を荒くして答える。そして「明日にすればいいだろうが」と続けた。

「すみません、でもやっぱり今すぐでないと駄目なんです。時間を置くと、また臆病風に吹かれそうで」

ヘクターはそつとレーヴァテインに触れる。その様子を見てヴァングリフはヘクターの心中を察した。

「そうか、なら止めはしない。帝国の事は俺に任せろ。お前はあなたの役目に集中するんだ。いいな？」

「はい」

ヘクターはゆっくりと馬を進め、橋を渡り始める。

やがて橋の中央辺りに差し掛かった時、ヴァングリフがもう一度ヘクターを呼び止める。ヘクターが振り向くと、いつの間にか第一大隊の兵士達がヴァングリフと共にヘクターを見送る為に集まって来ていた。

「みんなお前の帰りを待ってるんだ。死んだりなんかするんじゃないぞ。必ず帰って来い」

ヴァングリフの言葉に続き、兵士達は口々にヘクターに声をかける。ヘクターは一度、手を振り上げるとすぐに前方に向き直る。

「レーヴァ」

視線を前にむけたままヘクターがレーヴァを呼ぶ。「どうした？」と答えるレーヴァに対し、

「必ず帰って来よう」

力強く言った。

「そうだな……」

レーヴァは静かに答える。そうして二人は帝国を後にしたのだった。

ダルゼウス帝国から南に進むこと数日間、野を越え、河を渡り、険しい森を抜けた先にその山脈は姿を現した。岩肌が露出し、辺りは霧に包まれ、今にも魔物が襲いかかってきそうな雰囲気漂わせるその山脈は『クジエート』と呼ばれていた。

「レーヴァ、ここがクジエート山脈だな？」

「ああ、どこかに地底へと続く洞穴がある。それを探すのだ」

霧がたちこめる道なき道を進む。

將軍が言っていた山賊とやらはこんなところにアジトを構えているのだろうか？　だとしたらそうとう肝が座った連中なんだななどと考えながらヘクターは馬を進めた。

しばらく進むと民家にしては少し大きめの建物が視界に入り、ヘクターは立ち止まった。

「レーヴァ、あれは一体……」

「こんな所に住もうという人間もいるのだな。しかし、あそこから人間の生気は感じない。変わりに私が感じるのは……」

「魔物か？」

ヘクターの鋭い質問にレーヴァは「かなり強力な魔力を持った……な」と付け加える。

「とにかく、進むしかないな」

ヘクターは霧の中に静かにたたずんでいる建物の扉をグッと押し開ける。そして中に入った途端、ヘクターは顔を覆ってこみ上げる吐き気を必死にこらえる。

「なんだ、これは」

かつてはリビングとして山賊達の憩いの場だったであろう室内は、真っ赤な血で満たされており、そこら中に人間の手足が散乱していた。相当悲惨な死に方をしたのだろう、ヘクターの足元に転がる生首は今でも断末魔の悲鳴が聞こえてきそうな程、恐怖に満ちた形相をしている。

「皆殺しか……」

レーヴァが冷静に口を開いた。しかし、ヘクターは室内を見渡した後に首をかしげながら、レーヴァに問う。

「レーヴァ、確かにこの場所からは魔力の残り香がするんだよね？」

「ああ、感じる。どうかしたのか？」

ヘクターはしゃがみ込んで異臭を放つ肉片を確認した後、レーヴァに答えた。

「この山賊達をやったのは魔物じゃない、人間だ。こいつらは鋭い刃物で切り刻まれている」

「なに？ ではこの魔力は……」

レーヴァが珍しく驚きの声を漏らした。

「魔力を使いこなす人間、まさかあの騎士か？」

ヘクターが言った後、二人は互いに口をつぐむ。

その後、先に口を開いたのはヘクターだった。

「室内の様子からすると、こいつらが殺されてからそう時間は経っていないみたいだ。敵はまだ近くに……」

「そのようだ。残されている魔力もそう薄れてはいない。急いだ方がいいようだ」

二人は建物を後にして先を急いだ。

更に進むと螺旋状に続く坂道が現れ、そこを下るとぽつかりと口を開いた巨大な洞穴が二人を迎えた。意を決して中へと進むと、更に下り坂が続く。ヘクターがどこまで続くのかと思い始めた時、ぼんやりと赤く光る開けた空間にたどり着いた。開けたと言っても辺

りは岩だらけで全体を見渡す事は出来ない。

「ヘクター、聞こえるか？」

レーヴァに言われるのと同時にヘクターの耳に飛び込んできたのは、剣と剣が交わる金属音のようだった。

「戦っているのか？」

気配を悟られないようにそつと近寄り、岩陰から様子を伺う。

ヘクターの視線の先では二人の人間が何かを言い合いながら激しく交戦していた。一人は赤毛のロングヘアに白い軽装具を身につけ、首元にも白いストールを巻いており、手には鮮やかな装飾を施した黄金に輝く剣を持っている。

そしてもう一人はというと、赤と青に彩られた派手な衣服に身を包み、髪は黒く、顔を仮面で隠した道化のような風貌であった。不思議な事にこの人物も金色に光る剣を持っていた。形、大きさ、どちらを取っても同じ剣だ。そして体つきから察すると二人とも女性のようなようだ。

ヘクターが見たところ優勢なのは赤毛の剣士のようで、四方を飛び回る道化の攻撃をことごとくいなし、余力を持って反撃に移る。しかし、道化もそう簡単に傷を負うことはなく、双方共に相手の出方を伺っている様子だ。

「黒騎士じゃないな、あいつらは一体」

声を潜めて、ヘクターがレーヴァに問う。

レーヴァが答えるよりも先に赤毛の剣士がこちらに気付き、

「誰だ！」

と叫ぶのと同時に腰に備えていた短刀をヘクターに向かって投げつけた。

「うわっ！」

すんでの所でヘクターは身をよじり、投げつけられた短刀をかわす。

「お前……その剣は！……」

ヘクターを見て、正確にはヘクターの持つレーヴァティンを見て

赤毛の剣士は動きを止める。

「危ないっ！」

ヘクターが叫ぶよりも早く道化の姿をした女性の剣が赤毛の剣士の腹部を貫いた。

「ぐっ、しまった・・・」

道化が剣を抜き去ると、彼女の腹部から大量の血液が吹き出した。真っ赤に染まった金色の刃を更に振り上げ、止めをさそうとする道化に向かってヘクターは走り出した。

「レーヴァ！」

ヘクターの一声でレーヴァが剣から飛び出し、そのまま道化に突進する。不意をつかれた道化は後方へと飛ばされるが、素早くその身をひるがえしてゆつくりと着地した。

その間にヘクターは赤毛の剣士の元へと駆け寄り、彼女の傷の具合を伺う。女剣士は既に意識を失い、辺りには血だまりが広がる。思った以上に重傷を負っているようだ。

「まずい、何とかしないと」

その時、レーヴァが後方からヘクターに声をかけた。振り向くと、彼の横に降り立ったレーヴァが、

「先程感じた強い魔力、どうやらあやつが残して行ったものの様だと告げる。」

「なっ、しかしあれはどう見ても人間……」

ヘクターは立ち上がり道化を見やる。

「外見は確かに人間だが、中身は全く違うようだな」

更にレーヴァが言う。

「ドラゴンに、炎の神剣レーヴァティン……するとあなたがヘクター様、ですね？」

ゆつくりと歩み寄りながら道化が声をかけてくる。

「なぜ、俺の名を？」

「そしてあなた。レーヴァ、とおっしゃるのですか」

ヘクターの質問を無視した道化は今度はレーヴァに語りかける。

「フン、人間を真似たモンスターとはなんとも滑稽だな」

レーヴァは臆することなく言葉を返す。すると道化は仮面の下から不敵な笑いを漏らした。彼女の高笑いは洞穴中に響き渡る。

「レーヴァ様あ、何もご存知ないのですね。その様子ではご自身のお役目にもお気づきにはなっていないようですわね。ふふ…あはははは！」

「私の役目……だと？」

レーヴァは突然、動揺を浮かべてふさぎこむ。それを見たヘクターはレーヴァを代弁するように道化に向かって叫ぶ。

「貴様、何者だ！」

すると道化はわざとらしく「あらっ」と声を上げた後に右腕を胸の前へと運んで片膝をついた。

「これは失礼。アタシの名はカーミラ。カーミラ・ミルドレッドです。ご覧の通り『悲面の道化師』ですわ。まあ、どちらでもお好きな方でお呼びください。ちなみにあの屋敷の人間達を手にかけたのはアタシじゃありませんわ。」

「お前じゃないとしたら他に誰がいるんだ？」

ヘクターが再び問いかけるが、カーミラと名乗った仮面の女は何も答えはせずにただ「ふふふ……」とあざける様に笑い続ける。

「う……」

その時ヘクターの背後でうめき声が聞こえ、振り返ると倒れていたはずの赤毛の剣士が深手を負った身体に鞭を打って立ち上がる所だった。

「まあ！ まだ立ち上がる事が出来るとは流石ですわね。……しかし、立っているだけで精一杯のようですが？」

「おのれ……」

女剣士は歯を食いしばり敵意をむき出しにした視線をカーミラに向ける。しかし剣を持つ手は震え、傷口からはなおも大量の血が流れている。真っ白だった衣服や鎧は紅に染まり、表情はまさに蒼白そのものだ。

「あははっ！ 何をムキになっているのです？ もしかして先程の続きをご希望なのですか？」

カーミラの挑発的な言葉に赤毛の剣士は無言のまま剣を前方へと突き出す。

「あらあら……」

カーミラは二、三度軽く首を横に振り女剣士と同じ構えを取るが、思いとどまったのかすぐに剣を下ろす。

「うふふ、残念ですがやめておきましょう。とんだ邪魔が入ってしまいましたからね」

ヘクターはこの時、カーミラからの刺さるような視線をその身に受けた。仮面越しにでも伝わってくる強烈な圧迫感へヘクターを凍りつかせた。

「彼らのおかげで命拾いましたね。でも、次はこうはいかないという事をお忘れなく。オルザ様」

「！」

ヘクターとレーヴァは思わず顔を見合わせた。

「道化め、いい気になるなよ……」

「ふふ、では皆様、ごきげんよう」

そう言い残してカーミラは洞穴の闇の中へと溶けていった。

カーミラが完全に去ったのを確認した後、オルザと呼ばれた女剣士はその場に崩れ落ちた。ヘクターは急いで駆け寄り彼女を抱き起こす。レーヴァもヘクターの頭上から覗き込む。

「かなり危険だ。早く手当てを……」

そこまで言った後、ヘクターは口を閉じるのも忘れて身を固める。

バカな、傷口がない！ さっき見た時は確かに深い傷があったのに、今はどこにも見当たらない……

ヘクターはパニックを起こしそうになるのを必死にこらえてレーヴァを見やる。ヘクターと目を合わせたレーヴァも驚いた様子で、「カーミラとやらの言った事は本当の様だな。こやつが剣聖オルザだ」

ヘクターに告げる。

「剣聖オルザは女だったのか……しかしなぜ傷が癒えているんだ？」
「不死人の力としか考えられんな。私も詳しくは分からないが、冥府の王との契約によりオルザはある一定の条件の元でしか『死ねない身体』となった。たとえ全身を切り刻まれようと深い海の底へと沈められようと、決して命を落とすことはない」

ヘクターはゴクリと喉を鳴らした。一見すると自分とさほど変わらない年齢に見受けられるこの女性が、三百年以上も生き続けている伝説の剣士だとは、にわかには信じられなかった。

程なくしてオルザは目を覚ました。そしてヘクターを見るなり彼に名を尋ねる。ヘクターが名乗るのを聞きながら近くの岩場に腰掛け、オルザはゆっくりと二人に視線を送った。

「ヘクター、そのドラゴンの名は？」
と続けて質問する。

「彼はレーヴァ、神剣に宿りしドラゴンです。そしてこの折れた剣が……」

「炎の神剣レーヴァテイン。だな」

オルザはヘクターよりも先に神剣の名を上げた。

「あなたが剣聖オルザなのですね？」

ヘクターの問いにオルザは「ああ」と言っただけ。

「先程の道化は何者だ？」

続けてレーヴァが問いかける。するとオルザは首を横に振ってから、
「詳しく知っているわけではない、だが何日か前から私を監視していたようだ」

「カーミラ、と名乗っていました。奴の狙いは一体？」

続けてヘクターも質問を向けるが、オルザも分からないといった様子で再び首を振る。「奴の事はいずれ分かるだろう。それよりもお前達が私の元を訪れたのはその修理のためだろう？」

ヘクターがうなずく。

「可能か？」

レーヴァが尋ねた時、オルザは鋭い視線でレーヴァを睨みつけた後に、

「誰に聞いている？ 私以外にその剣を直せる者などいないだろう？」

強気な発言を返した。彼女の態度に少し尻込みしながらヘクターが口を挟む。

「あなたにレーヴァティンを修理していただく為に私達はここまで来たのです。引き受けていただけますか？」

ヘクターはオルザに詰め寄る。

「……ヘクターよ、修理するかしないかはお前次第だ。お前が神剣の力を欲する理由を私は見極める必要がある」

力を欲する理由。オルザの問いにヘクターは黙り込み、同時にレーヴァも口をつむぐ。

「ラディアスの剣をどうやって手に入れたか、なぜドラゴンとの契約に応じたのか、それはこの際どうでも良い。肝心なのはなぜ力が必要なのかだ。ヘクターよ、お前は答えられるか？」

ヘクターは何も言わずに立ち尽くしていた。様々な想いが葛藤し、めまいさえ覚える。ダリル、ソフィア、ヴァングリフ、永遠の眠り、もう帰らない友、竜の力、黒い甲冑の騎士。

考えるたびに粉々に砕けそうになる心を必死に支える。そして隣のレーヴァに視線を向け、固く誓った決意を思い出して今一度、己自身に問いかける。

なぜ、力を欲するのか……

やがてオルザへと真っ直ぐに向き直り、ヘクターは答えた。

「私には護らなくてははならない人がいます。彼女はクルニール王国の黒騎士によって『夢魔の刻印』をその身に受けたのです。私を護る為に身代わりとなって……」

オルザは何も言わずにヘクターの話を聞いている。

「今の私では黒騎士には勝てません。そればかりか彼女の呪いを解

くことも叶わない。だから私は力を求めてあなたの元へ来ました」
ヘクターは握り締めたこぶしに力を込める。

「お願いします。レーヴァテインを修理してください。私にはこの剣が、レーヴァの力が必要なのです」

オルザはヘクターの瞳を見つめ、少し考えた後に、
「クルニールの黒騎士か……いいだろう。」

ヘクターは目を輝かせてオルザに礼を述べる。しかし、それを遮りつてオルザは言った。

「だが、その前にいくつか話しておくことがある」

ヘクターは虚をつかれ、オルザの話に聞き入る。

「三百年前にラディアスによって地の底に封じられし『邪神 サラデイス』についてだ」

深刻な面持ちでオルザは語りだす。ヘクターだけでなくレーヴァも押し黙り、耳を傾ける。

「ラディアスは五つの宝玉の内、四つしか持たなかった為にサラデイスを滅ぼすことは叶わず、己の命を犠牲に奴を地の底へと封印した。ここまでは知っているな？」

「事実だと信じるようになったのは最近ですが……」

ヘクターは想いのままに答えた。

「その後ラディアスはこの世界から姿を消し、神剣と宝玉は各地に保管された。だが肝心のサラデイスが封印された地は人々の間では語られていない。」

ヘクターははつと声を上げ、

「確かに、伝説の語り口は人によって様々だが、邪神の封印されし場所は聞いた事はなかった」

「そう、それこそが人々が一番恐れ、いつも気に病んでいたことなのだ。だがかつての人間達は後世にはその事を伝えようとはしなかった。なぜか？ 答えは人間達の心の中にある」

「心の中？」

ヘクターは聞き返した。オルザはキツとヘクターに視線を合わせ、

答える。

「たとえどんなに苦しみ、悲しみ、嘆いても、人々は争うことをやめはしないのだ。その事を熟知し、歴史が繰り返されるのを恐れたある権力者は封印の地の真上に国を築いた。恐らく、邪神の眠る地に国を構えればそう簡単に手出しはされないという浅はかな考えだったのだろう」

「まさか、その国が……」

その先を口にするのをためらっているヘクターに向かい、オルザは重々しく答えた。

「クルニール王国だ」

「なんと愚かな……」

レーヴァが嘆く。彼にとってもこの事は未知の情報だったのだろう。オルザは更に続ける。

「そしてもう一方の国、ダルゼウスの王は神剣を持ち帰った。互いに戦いの記憶を共有する事で争いを避けようとしたのだろう。そして争いのない平穏な日々が続き、神剣の必要性を見失った王はルフオートへと神剣を移し、そこを封印の地とした」

「それが、あの祠か」とヘクター。

「ここ最近のクルニールの異変や魔物達の増大。サラデイスの邪念がこれらに関わっているのは間違いないであろうな。もしかするとあの国に生き残りは皆無かもしれない」

オルザは首を横に振り、ため息を漏らした。

「しかし、邪神は封印されているハズです。今までは我が国とも親密に外交を行っていました。それがなぜ」

ヘクターの質問にレーヴァが重ねて問いかける。

「邪神の復活が迫っているのか？」

オルザは立ち上がり黄金に輝く剣を鞘に納めながら、

「そうとしか考えられまい。地底から溢れるサラデイスの思念が悪しき者共を呼び集め、クルニールを影から支配している。もはやあ

の国は魔物の巣窟だろうな」

吐き捨てるように言った。

「では、あの黒騎士もサラデイスによって仕向けられた魔物？」

「いや、あやつは確かに人間だ」

ヘクターの言葉をレーヴァが制した。

「あやつからは邪神の意思を感じ取れなかった。先程のカーミラやモンスター共とは違い、あやつは自身の意思で我らに向かってきたのだ」

「では一体、あの騎士は何者だ？ あの魔力は一体……」

黒騎士との戦いを思い返ししながら考え込む二人に対してオルザが告げる。

「関係があるかはわからないが、人間にもまれに魔力を持つてこの世に生を受ける者がいる。その者は魔道に精通し、かつて私やラデアスと共に邪神と戦った男だ」

レーヴァがピクリと反応し、オルザの方を見やる。

「『魔道士 リューハイン』か」

オルザはこくりと頷いた。

「リューハインはドラゴンにも匹敵する魔力を持ち、かつての戦いで重要な役割を果たした。今は墓の中だが、奴の血筋の者がこのフォルティアのどこかにいるはずだ。リューハインの直接の子孫である為だろうか、奴をもしのぐ程の魔力の持ち主だと聞く。名は確か…… リュンベルクと言ったな」

「竜と同等の魔力？」

オルザの話はすでにヘクターの想像の範疇を越え、彼はただただじろくことしか出来なかった。

「リュンベルクに話を聞けばその黒騎士について何らかの情報はえられるかもしれんな。サラマンディアの族長なら居場所を知っているだろう。このフォルティアにおいて、私の次に長命な者だ」

サラマンディア族、ルフォートの地を治め、また神剣の祠を代々守ってきた種族だ。

「そうか、一度立ち寄る必要があるな」

ヘクターはレーヴァに向かつて言う。

「ああ、いずれにしてもあの騎士とはまた、あいまみえる事になる。少しでも情報を手に入れておいて損はないだろう」

「さあ、話はこのくらいにしておこう。ついて来い」

そう言つてオルザは洞穴の奥へと歩き出した。

「あ、あの、どこへ？」

ヘクターが間の抜けた声を出すと、オルザは一度立ち止まって振り返り、

「レーヴァティンを修理するのだろうか？」

と言つて再び歩き出した。

オルザに連れられたヘクターとレーヴァは洞穴の最深部へとたどり着いた。先程いた場所よりも一回り狭い円形の部屋だ。中央には大きな陣が描かれ、その周りに蠟燭がいくつも並んでいる。

「ヘクター、レーヴァティンを」

オルザが手を差し出す。言われるがままにヘクターはレーヴァティンをオルザに手渡した。

オルザはレーヴァティンを陣の中央へと置いた後に小声で何かを唱え始める。そして短剣で自身の手首に傷をつけた。流れ出る鮮血がレーヴァティンに触れた瞬間まばゆい光が室内を包み、ヘクターは思わず目をつぶった。

そして次に目をあけたとき、光はおさまっていた。

「ヘクター、こちらへ」

オルザに促されたヘクターが陣の中央へと進むと、ボロボロの状態からは想像もつかなかった輝きを取り戻し、刀身も修復された剣がそこにあつた。

「これが……レーヴァティン？」

しばしの間その場に立ち尽くし、神剣たる風格を漂わせるレーヴァティンにヘクターは見入ってしまった。

「これで器は完成したな。後は力を注ぐだけだ」

レーヴァが言う。そして補足するようにオルザが続けた。

「五つの宝玉がレーヴァティンに力を注ぐ。全てを集めない限り真の力を引き出すことは不可能だ。ヘクターよ、良く聞くのだ。これより私が語るのは宝玉のありかを示す『古代竜の言霊』だ」

ヘクターは固唾を飲んで耳を傾けた。

『青く澄み渡りしノアークの湖、主が護るは竜の涙』

『冥府の風に包まれし死者の溪谷、主が護るは竜の囁き』

『かつて栄華を誇りし王の都、主が護るは竜の響き』

『白炎轟くゲイブルの火口、主が護るは竜の怒り』

「古代竜の言霊はここで終わっている。五つ目の宝玉に関しては何も語られてはいない。まずはこの四つを集めるのだ。さすれば道は開かれよう」

オルザの言葉にヘクターは頷く。すると、

「ヘクターよ、事態は急を要する。すぐに出発するのだ。グズグズしては間に合うものも間に合わん」

レーヴァがヘクターに告げる。そしてそれに従いヘクターがレーヴァティンを手にしようとした時、

「最後に一つ、言っておくことがある」

オルザが言った。

「修復されたレーヴァティンを手にした瞬間から、お前は逃れられない運命の連鎖につながる。決して臆することなく己の使命をまっとうする強い意思が必要だ。覚悟はあるな？」

「……ああ」

少し間を置いたが、迷うことなく答えたヘクターはレーヴァティンを手にする。

その瞬間、ヘクターの頭の中に電気が走るかのようにある映像がフラッシュバックする。

白銀に輝く鎧を身に纏い、淡い緑色の瞳をした青年がレーヴァテインを手に魔物達を次々に切り捨てていく。鬼気迫るその光景は鮮明にヘクターの脳裏に刻まれた。

そして弾かれたようにヘクターは我に帰る。

「今のは……」

「どうした？」

オルザに聞かれたが、ヘクターはとつさに「なんでもない」と言っ
てレーヴァテインを鞘に納める。隣でヘクターの様子を伺っていた
レーヴァも首を傾げていた。

「レーヴァ、行こう」

そう言ってからオルザに礼を述べるヘクター。

「来たるべき時には私もお前の力となろう。それまでになんとして
も宝玉を手に入れるのだ」

オルザに言われ、ヘクターは強く頷いた。

「剣聖オルザよ、世話になった」

レーヴァが炎へと姿を変えていき、レーヴァテインに吸い込まれ
ていく。そして二人はオルザの元を後にした。

「赤き翼のドラゴン、レーヴァ……」

ヘクターの後姿を見送った後、オルザは左手にはめられた二つの指
輪を見つめながら呟いた。

第四幕 剣聖（後書き）

ようやくヘクターの旅が始まりました……
次話もがんばります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4770c/>

E t e r n a l D r a g o o n S t o r y

2010年10月10日07時26分発行